

せんたーせんた

て専らとりきむること。史記其於諸侯... せんたん 占断 占(ひ)て事を断定すること。

せんたんのうた 栴檀板 栴檀板 栴檀板 栴檀板... せんたんのうた 栴檀板 栴檀板 栴檀板 栴檀板

せんたんのうた 栴檀板 栴檀板 栴檀板 栴檀板... せんたんのうた 栴檀板 栴檀板 栴檀板 栴檀板

せんたんのうた 栴檀板 栴檀板 栴檀板 栴檀板... せんたんのうた 栴檀板 栴檀板 栴檀板 栴檀板

せんた

せんち

せんち

せんちゅう 潛蟄 ひそまかくること... せんちゅう 潜蟄 ひそまかくること

せんちゅうの まろしふみ 選定申文... せんちゅうの まろしふみ 選定申文

せんちゅうの まろしふみ 選定申文... せんちゅうの まろしふみ 選定申文

せんちゅうの まろしふみ 選定申文... せんちゅうの まろしふみ 選定申文

せんちーせんち

せんち

せんち

せんち

せんちゅう 潜蟄 ひそまかくること... せんちゅう 潜蟄 ひそまかくること

せんちゅうの まろしふみ 選定申文... せんちゅうの まろしふみ 選定申文

せんちゅうの まろしふみ 選定申文... せんちゅうの まろしふみ 選定申文

せんちゅうの まろしふみ 選定申文... せんちゅうの まろしふみ 選定申文

せんりーせんり

せんりよ 一禪侶 (名) 僧侶。出家。僧。又、禪宗の僧侶。著聞「これを日がしの御堂と名づく、禪侶をおきて不退の勤めを致さる」盛衰記「八幡」香烟出「意、老輩無入、禪侶向、壇金、聖鳴有聲」曰、特に諸大夫又は北面の侍などの子の出家したる者の稱。

せんりよ 一禪房 (名) 「口ひげあるえびすの義」西洋人をいやしめていふ語。
せんりよ 一清龍 (名) せんりゆら (清龍)に同じ。
せんりよ 一からくわんでうやく 一戦房交換條約 (名) 交戦國が互ひに其の捕虜を交換する條約。
せんりよ 一浅緑 (名) うすきみどり色。うすみどり。あさみどり。魏彦深時「新枝含淺綠、晚夢散輕紅」
せんりよ 一全力 (名) あらゆる力。すべての力。全體の力。
せんりよ 一閃綠岩 (名) 「地」品質粒状の火成岩。主として斜長石と角閃石との二より成る。我が國、中部地方に多く産す。
せんりん 一旋輪 (名) 旋轉する車輪。
せんりん 一鮮鱗 (名) せんぎよ鮮魚)に同じ。
せんりん 一酒鱗 (名) ひそみかくれて居る魚。太平記「山門、水は深し、智は淺し、酒鱗、水禽にたにも不及、以何可致、宗論」選述詩「還見酒鱗」
せんりん 一前林 (名) 前にある林。
せんりん 一禪林 (名) 禪宗の寺院。
せんりん 一禪林實訓書 一禪者靜慮也、林者叢林也、蓋謂山林之士、湖海之流、

せんれ

せんれ 一線縷 (名) いとすぢ縷筋)に同じ。杜甫詩「危途中縷縷、仰望垂線」
せんれ 一蕪類 (名) 「植物花植物、若類の一種、吾人の認めて此の類の植物となすものは皆有性世代に屬するものなり。蕪葉の別を有し、履假根を具ふ。全體、扁平組織より成れども、表皮は明かに存し、莖の中心の細胞は伸長して維管束の原始をなす。葉も亦往往中肋に擬せるものを有す。有性生殖器は雌器及び雄器にして、雌雄異株又は同株なり。雌器中の卵球は受精の後、無性世代の植物體となる。此の類に屬する植物は、廣く世界各地に分布し、有用なるもの殆ど無し。
せんれ 一前壘 (名) まへのとりで。前方にあるとりで。北史「李至夜有戰兵數千、研平前壘」
せんれ 一仙靈 (名) 神仙の靈。百六杯には自らに仙靈に通達し、鮑照詩「天從師入道、結友事仙靈」
せんれ 一先靈 (名) 先祖の靈魂。後漢書「先靈無所依歸」
せんれ 一先例 (名) 以前よりの慣例。以前よりの例。盛衰記「北京には、一番に延慶寺の行を立て、御を打ち、山山、寺次第を守りて立て、並ぶるは先例也」運歩色葉「先例也」梁書「先例有先例」
せんれ 一洗禮 (名) 基督教に加入する者の、罪惡を洗滌して、新しき人とならしむるしに施行する儀式。
せんれ 一鮮麗 (名) あざやかにして、うるはしきこと。鮮美。南史「麗麗運運、衣車、車服、鮮麗、衣服多改舊形制」
せんれ 一織麗 (名) ほそやかにしてうるはしきこと。しなやかにしてうるはしきこと。唐書「麗麗織麗無得、以供」東觀漢記「漢之方、草之類、放、八分之織麗、學便可至、而天勢失矣」張華文「被服織麗、着麗麗」
せんれ 一前例 (名) せんれい(先例)に同じ。隋書「不無前例、卿何憚焉」南史「漢漢之例」
せんれ 一前令 (名) 以前に發布したる命令。まへの命令。さきの法令。令義解「經司部中、經女部、經令、經令、經令、經令、宋書「前令通而後改」
せんれ 一仙靈皮 (名) とちの木皮。
せんれ 一仙麥 (名) 「植」せんりやう草類に同じ。
せんれ 一染料 (名) 「化」木綿、絹、羊毛等を染色するに用ひらるる物質。直接に纖維に固着するものあり、媒染劑によりて纖維に固着するものあり。
せんれ 一燃料 (名) ねんれう(燃料)に同じ。
せんれ 一戰列 (名) 戰爭に於ける陣列。
せんれ 一先烈 (名) 先代の威烈。前代の遺烈。前烈。書經「格其非心、俾克紹先烈」
せんれ 一淺裂 (名) 「植」植物學上の用語。葉縁の一形にして、缺刻の一種。葉身の缺刻甚だ淺きもの。即ち、梧桐の葉の如し。

せんれ

せんれ 一淺劣 一淺劣 (名) 才智淺くして劣れること。淺薄にして拙劣なること。吳志「愚智淺劣」
せんれ 一淺劣 (名) いやしく劣れること。淺書「其劣劣如儂」
せんれ 一屏劣 (名) 弱くしておとれること。屏前にして劣れること。
せんれ 一前列 (名) 前の列。前面の隊列。左傳「姚公孫林殿而射、前列多死」
せんれ 一前烈 (名) せんれつ(先烈)に同じ。太平記「重日、夜に逸遊を事として、前烈を地下にはつかしめ」書經「惟先王建邦、啓土、公劉克篤前烈」
せんれ 一全裂 (名) 「植」植物學上の用語。葉縁の一形にして、缺刻の一種。葉身の缺刻、其の中肋又は肋に達するもの。例へば、羊齒類に屢見する如し。
せんれ 一洗煉 (名) 物を洗ひ又は煉る如くに、思想又は詩文の字句などを推敲すること。
せんれ 一選練 (名) えりすぐること。選拔。史記「明日有欣、以選練賢任」
せんれ 一前聯 (名) 「漢詩の律にて、互ひに對句をなす第三句と第四句と。韻脚(後聯の對)二節に分かれたる新體詩の、前の節。
せんれ 一線路 (名) 鐵道、電車などのみちすぢ。
せんれ 一船路 (名) 船舶の航路。ふなみち。ふなち。晉書「船路甚近」南史「以鐵鎖貫車輪、過船路」
せんれ 一船隻 (名) 船のしりへ。と。南史「王僧虔、秀行、大雷風波、起船隻」
せんれ 一前路 (名) 前にある道路。まへのみち。魏書「裕以官軍在河南

せんろ

せんろ 一善路 (名) 善の道。善なる方向。魏碑「八鳥」最愛の婦人に別かれ、涙玉を貫く思ひを善路に歸して、盧舍那佛を建立す。
せんろ 一淺陋 (名) あさはかなること。見聞の狭く固陋なること。荀子「見少聞曰淺、少見曰陋」
せんろ 一賤陋 (名) いやしきこと。げす。下賤。柳宗元文「西庶賤陋、習習淺下」
せんろ 一選錄 (名) えらびて書きすること。
せんろ 一撰錄 (名) 撰して記録すること。撰述してしるすこと。南史「撰錄少有志、尙當世詔命表奏、輒手自書寫、奉元隆安時、大小悉撰錄」
せんろ 一閃綠岩 (名) 「地」せんりよ(閃綠岩)に同じ。
せんろ 一織羅 (名) 大根を細そき筋に刺むこと。せんろつぼん。庭訓往來「十月、菜者織羅」
せんろ 一仙話 (名) 仙人又は仙家に關する談話。
せんろ 一禪話 (名) 禪學の談話。禪學の談話。
せんろ 一先王 (名) 前代の君王。易經「先王以建萬國」書經「湯如居、先王居」左傳「昔者、先王爲周、陶正、以服事我先王」昔の聖王。論語「禮之用、和爲貴、先王之道、斯爲美」孟子「道先王之法、而過者、未之有也」
せんろ 一先皇 (名) せんてい(先帝)に同じ。
せんろ 一專橫 (名) ほしいままなること。

せんろーせんわ

せんろ 一撰錄 (名) 撰して記録すること。撰述してしるすこと。南史「撰錄少有志、尙當世詔命表奏、輒手自書寫、奉元隆安時、大小悉撰錄」
せんろ 一閃綠岩 (名) 「地」せんりよ(閃綠岩)に同じ。
せんろ 一織羅 (名) 大根を細そき筋に刺むこと。せんろつぼん。庭訓往來「十月、菜者織羅」
せんろ 一仙話 (名) 仙人又は仙家に關する談話。
せんろ 一禪話 (名) 禪學の談話。禪學の談話。
せんろ 一先王 (名) 前代の君王。易經「先王以建萬國」書經「湯如居、先王居」左傳「昔者、先王爲周、陶正、以服事我先王」昔の聖王。論語「禮之用、和爲貴、先王之道、斯爲美」孟子「道先王之法、而過者、未之有也」
せんろ 一先皇 (名) せんてい(先帝)に同じ。
せんろ 一專橫 (名) ほしいままなること。

せんろ

せんろ 一撰錄 (名) 撰して記録すること。撰述してしるすこと。南史「撰錄少有志、尙當世詔命表奏、輒手自書寫、奉元隆安時、大小悉撰錄」
せんろ 一閃綠岩 (名) 「地」せんりよ(閃綠岩)に同じ。
せんろ 一織羅 (名) 大根を細そき筋に刺むこと。せんろつぼん。庭訓往來「十月、菜者織羅」
せんろ 一仙話 (名) 仙人又は仙家に關する談話。
せんろ 一禪話 (名) 禪學の談話。禪學の談話。
せんろ 一先王 (名) 前代の君王。易經「先王以建萬國」書經「湯如居、先王居」左傳「昔者、先王爲周、陶正、以服事我先王」昔の聖王。論語「禮之用、和爲貴、先王之道、斯爲美」孟子「道先王之法、而過者、未之有也」
せんろ 一先皇 (名) せんてい(先帝)に同じ。
せんろ 一專橫 (名) ほしいままなること。

せんろ

せんろ 一撰錄 (名) 撰して記録すること。撰述してしるすこと。南史「撰錄少有志、尙當世詔命表奏、輒手自書寫、奉元隆安時、大小悉撰錄」
せんろ 一閃綠岩 (名) 「地」せんりよ(閃綠岩)に同じ。
せんろ 一織羅 (名) 大根を細そき筋に刺むこと。せんろつぼん。庭訓往來「十月、菜者織羅」
せんろ 一仙話 (名) 仙人又は仙家に關する談話。
せんろ 一禪話 (名) 禪學の談話。禪學の談話。
せんろ 一先王 (名) 前代の君王。易經「先王以建萬國」書經「湯如居、先王居」左傳「昔者、先王爲周、陶正、以服事我先王」昔の聖王。論語「禮之用、和爲貴、先王之道、斯爲美」孟子「道先王之法、而過者、未之有也」
せんろ 一先皇 (名) せんてい(先帝)に同じ。
せんろ 一專橫 (名) ほしいままなること。

せんろ

そらがへし 總返 (名) 軍陣の語。退却の途中より全軍引き返して進むこと。松原自休手録「弱弱と令釋ひ、敵を引き出し、總返しにして敵を退入寺内」

そらがまへ 總構 (名) すべてのくわ。そらぐるわ。太閤記「三浦山崎の東、總構の外を廻つて惟任が勢に向かはんとすれば」奥羽永慶軍記「三浦山崎の日の未の刻には、總構残りなく破れて、本丸許りに成りにけり」

そらがみ 總髮 (名) そらはつ (總髮) に同じ。

そらがら 僧柄 (名) 僧の品位。僧としての人柄。狂言「僧の外より僧柄で御座る」

そらかり 僧伽梨 (名) 梵語。僧の衣。和名三衣。金玉義林云「僧の衣、一僧伽梨云大衣、二鬱多羅府云中衣、三安陀會云下衣」伊勢大輔集「西の方なほとく行かん、そらかりの衣を纏へる絲にひかれて」

そらかりよく 増加力 (名) 増加し得る能力。

そらかかん 増加員 (名) 増加する人員。増加せる人かす。

そらかん 總監 事務又は人員の全體をすべし監督すること。又は其の官職。南史「以儒學總監諸生」唐書「以中書舍人苑總監」

そらかんくわんぼう 總監官房 (名) 警視廳の一部局。官吏の進退、身分、官印、關印の管守、文書の往復及び記録、編纂、各部所の成案の審査及び制規、高等警察會計、其他、他の主宰に屬せざる事務を掌るもの。警視廳官制「總監官房」

そらかんくわんぼうしゆじ 總監官房主事 (名) 總監官房に置き、警視廳の命を受けて總監官房の事務を掌理し、部下の官吏を指揮・監督するもの。警視を以てこれに充つ。

そらかんちやうもちやう 總勘定元帳 (英: General Ledger) (名) 元帳の帳。日記帳に記載せる種種の勘定を各科目毎に口座を設けて轉記し、一定の期間内に於ける營業全般の盛衰、財産の増減、變化の状態を明瞭ならしむるもの。損益表、貸借対照表などは、この帳簿に基きて作成せらるるものとす。元帳。

そらさき 走騎 (名) 騎馬にて走る人。

そらさき 叢記 種種の事をつめ記すこと。又、其の書籍。

そらさき 僧祇 (名) 梵語。あそらさき (阿僧祇) の略。盛衰記「阿僧祇一見の新客は初僧祇の功德を得」智度論「僧祇衆言數阿秦言無」

そらさき 奏議 意見を君主に奏上すること。又、その意見書。漢書「奏議」公卿稱「職、奏議可也」

そらさき 贈寄 きざら (寄贈) に同じ。

そらさき 僧祇劫 (名) 梵語。あそらさき (阿僧祇劫) に同じ。開談「以佛神通争的義、經僧祇劫欲朝宗」

そらさき 僧祇支 (名) 梵語。Kushaka 覆衣と譯す。肩に掛けて左腋を掩ひ、一端は斜めに右腋を掩ひ、長方形にて、袷の下に著るもの。

そらさき 増給 給與をますこと。殊に俸給以外の給與をますこと。陸軍省官制「増給及増給に關する事項」

そらさき 宗及棚 (名) 「天王寺

そらさき 屋宗及の造り始めたよりいふ「せいらうだな(西棟棚)の異名。南方録「城樓棚中天王寺や宗及の作也、それ故、宗及棚とも申す」

そらさき 僧形 (名) 僧侶のすがた。盛衰記「僧形として生魚を手に把りたる心うさよ」

そらさき 宗仰 たふとび仰ぐこと。俗語「學者所共宗仰」晉書「其皆聞風宗仰自遠而至」宋史「王質醉文典學、爲世宗仰」

そらさき 崇敬 あがめうやまふこと。そらけい。太平記「三上皇崩御、天下の大善知識にて、公家・武家崇敬類ひ無かりしかば」

そらさき 忽迷 あわただしきさまにいふ語。後漢書「朝候意、履屐迎門。注履屐謂納履曳之、而行言忽迷也」

そらさき 總桐 (名) 全體を桐の材を以て製作したるもの。主に簞笥などにいふ。(前桐との對)

そらさん 走禽 (名) 走禽類に屬する鳥。

そらさん 奏琴 琴をかなづること。彈琴。史記「趙主令前奏琴日、竊聞長卿好之」

そらさん 送金 一) 地方より他の地方に金を送ること。二) 商「そらさんかはせ(送金爲替)の略」

そらさん 増金 金銭を増加すること。又、其の金銭。ましきん。

そらさん 贈金 金銭をおくこと。又、其の金銭。

そらさん かせ 送金爲替 (英: Remittance by draft - Remittance) (名) 商「隔地間の送金に、銀行の媒介により、現金を輸送することなくして其の目的を

達する方法、並爲替(英: Remittance) とに分かつ。並爲替とは現金の輸送に代へ、銀行より手形を購求し、これを受取地に送り、其の地の銀行より現金を受け取らしむるをいひ、電信爲替とは送金の依頼を受けたる銀行が支拂地の支店又は取引銀行に宛て、某に金何圓を支拂ふべき旨の電報を發し、受取人が送金依頼人の發したる電報を持參して、該金の支拂ひを請求したるとき、該支店又は取引銀行にて直ちに支拂ふものをいふ。

そらさんかはせがた 送金爲替手形 (英: Remittance draft) (名) 送金爲替の場合に、銀行より振り出す爲替手形。

そらさんしや 送金者 (名) 送金する人。

そらさんてがた 送金手形 (英: Remittance draft) (名) そらさんかはせがた(送金爲替手形)の略。供託物取扱規程「銀行の送金手形若しくは郵便爲替券等」

そらさんてすれう 送金手数料 (名) 送金爲替の依頼人が銀行に支拂ふ報酬。爲替打歩。

そらさんしやう 走禽類 (名) 鳥類。推動物中、鳥類の一目。翼の發達不完全にて飛翔に適せざるを以て、龍骨突起を缺く。脚は強大にして疾走し、他の鳥類と異なり骨内に氣嚢を有せず。駝鳥、ひくひりの類、之に屬す。我が國には一も産せず。

そらさん 走狗 (名) 獵りの時などに驅け走らるる人の用を爲すいぬ。轉じて人に使役せらるる人。戰國策「世無東郭俊盧氏之狗、王之走狗已具矣」史記「狡兔死、走狗烹」

そらさん 瘦軀 (名) やせたる軀幹。

やせたるからだ。そらさん 僧具 (名) 僧侶の用ふる器具。

そらさん 僧供 (名) 僧侶に供養するもの。宇津保傳「僧供はまんどころ。なかつかさのじようよしのり居て、御讀經のそらぐのこと行ふ」宇治拾遺「御房何事したらんに、大衆に僧供ひかんといひければ」盛衰記「大衆に僧供座に著いて僧供行はんとしければ、導師あまりに還かりければ」

そらさん 總括 (名) そらくわつ(總括)に同じ。

そらさん 總崩 (名) 全體のくづれやぶること。全敗。

そらさん 僧供養 (名) 僧に供養すること。榮華傳「同じく僧供養せさせ給ひて」

そらさん 總曲輪 (名) 城門内の内を廣く呼んで總曲輪と云ふ。

そらさん 葱花 (名) ねぎの花。張巡文「葱花光浮五色、藍皮密理美至」三推「葱花くわれん葱花の略。建武年中行事「六月十一日中興行幸の時御輿は葱花なり」目「葱花ばらうし紫葱」の異名。

そらさん 總會 (名) 其の機關又は關係などの關係者全員の會合。即ち、創立總會・株主總會の類。

そらさん 總會議 (名) 總會の討議。總員の會議。行政裁判所處務規程「行政裁判所の總會議」同條「總會議の議事」

そらさん 總括 總括 全體をしくめること。一まとめにすること。包括。晉書「總括憲臺、豫聞政道」北史「王、總括古今名妃賢后、凡爲四卷」

そらさん 總論(論)そらがふ(綜合)に同じ。目(教)生徒の有する、又は生徒に生ぜしめたる箇箇の表象を整理、結合して、一概念を構成せしむる。

そらさん 總括教授 (名) 綜合教授。總括教授(英: Synthetic Instruction) (名) 法「遺贈の」(英: Simple Bequest) (名) 遺贈の。受贈者が遺贈義務者の一身に專屬するものを除き、其他一切の權利・義務を總括して承継するもの。包括遺贈(特定遺贈の對)

そらさん 葱花輿 (名) 次條に同じ。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の上に據る寶珠の彩色したる彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。

そらさん 葱花盤 (名) 屏形の彩色の珠を据ゑたる輿。



そらさん 僧家 (名) そらか(僧家)に同じ。僧侶。僧。節用「僧家」

そらさん 宗系 (名) 本家の系統。

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

そらさん 一送還 おくりかへすこと。考「送還」

「總的に結びたる愛のめ」
そらつ—**そらで** 「總追捕使」(名) 一國若しくは數國を守護する職。源朝の後に守護と改稱せり。東鑑六代三十二年「諸國被補總追捕使並地頭」長門國守護次第「土肥次郎實平號總追捕使」佐佐木四郎左衛門尉高綱、自大將殿、文治二年給之、號守護職。太平記七卷、武家雅意に任せて天下を司ると云ふも、王位も文道も相殘る故に、關東如形政道をも理め、君王をも崇め奉る體にて諸國に總追捕使をば置きたれども、諸司要脚の公事、正稅佛神の本主、相傳領には手を不懸。社寺の領地にて、檢斷などの事「御山守護境内、捕葉山城總追捕使等、如元可被奉行」東鑑、東寺文書、例進平野殿御庄庶事、合草一荷、總追捕使分、右任例進、令進候了。文保二年七月晦日、總追捕使平清秀」
そら—**總手** (名) すべてを組。總勢。總軍。全軍。甲陽軍鑑、草履取り二十内外の小者共十五人、狭竹持、總手の後に下がりたるを」
そら—**送呈** 人に物を送つて呈すること。進送すること。進呈すること。
そら—**贈呈** 人に物を贈ること。進呈すること。
そら—**贈呈品** (名) 贈呈したるもの。進上物。
そら—**宗祧** (名) 「てう統」は宗祧の廟。そらへう(宗廟)に同じ。左傳三年「乾不侯失守宗祧、敢告不弔」
そら—**雙調** (名) 十二律の一。第六の律。源朝、調物の師ども、ことにすぐれたるかぎり、そらでうふきたてて「運歩色葉」雙調」
そら—**層疊** 幾層もかさなるさまにうふ語。宋史五十四「有二本數千葉層疊高大、葉色成錦」
そら—**總點** (名) 總體の點數。
そら—**送傳** おくりつたふること。
そら—**送電** 電氣をおくすること。
そら—**増添** ぞうか(増加)に同じ。宋史、趙若、添戶口、勸課農桑、増修水利」
そら—**送電線** (名) 發電所より變壓所又は配電所等に電流を送る電線。
そら—**奏天樂** (名) 雅樂の名。教訓抄、奏弄樂、奏天樂、新樂」
そら—**僧徒** (名) 僧のともがら。僧侶。僧輩。東鑑、六文、僧徒、斷鎌倉中僧徒之兵杖。太平記三、三人僧徒、關東下向、庭訓往來十月、其外有職、僧稱、僧徒等、梁書、魏朝、夕從僧徒、禮師高祖」
そら—**總統** すべてを統べること。
そら—**瘦童** (名) やせたるわらは。南唐書、伍、詩詞、瘦童、有瘦童、馬之嘆」
そら—**總督** 軍務を統べ率ふること。又、其の官。漢書、西域傳、總督、城郭三十有六、陳書、吳明徹曰、步軍既多、吾爲總督、必身居其後、二或、方面の區域内に於ける政務、軍務又は部員を統轄する官府。「臺灣總督」
そら—**總督官房** (名) 總督府の官房。即ち、朝鮮總督府官房と臺灣總督府官房との稱。朝鮮總督府官房と臺灣總督府官房及左の四部を置く。臺灣總督府官房制、總督府に總督官房を置く」
そら—**總督府** (名) 總督が其の事務を取り扱ふ所。即ち、朝鮮總督府と臺灣總督府との稱。朝鮮總督府官房制、總督府に政務總監を置く。臺灣總督府官房制、總督府に總督官房を置く」
そら—**總督府令** (名) 朝鮮總督又は臺灣總督が、其の職權又は特別の委任による命令。即ち、朝鮮總督府令及び臺灣總督府令の總稱。
そら—**總年寄** (名) 大阪にて、年寄役の頭。
そら—**總噸數** (名) 噸數全部の總稱。西洋形船舶の噸數の全體。船舶噸量測定規則、總噸數」
そら—**僧尼** (名) 僧とあま。僧尼、凡、僧尼、上觀、玄象、假說、災祥、語及國家、妖惑、百姓、世、詐稱、得、聖道、並、依法律、付、官司、科罪」
そら—**走繞** (名) そらねう(走繞)に同じ。
そら—**證人** (名) しょうにん(證人)に同じ。徒然草、皆人の興する處言は、ひとりさなかりし物をといはんも證ななされて、いと定まりぬ」
そら—**奏任** (名) 古へ太政官より奏聞して任じたる官。内外の諸官の主典より以上をいふ。天條の略。
そら—**奏任官** (名) 天皇が内閣總理大臣、主任大臣若しくは宮内大臣の奏薦によりて任じたる官。即ち、三等以下九等までの高等官、高等官官等、俸給令、奏任官」
そら—**奏任官試補** (名) 奏任官に任用せらるべき資格を有して、官廳の事務の練習を命ぜられたるもの。奏任待遇とす。試補。
そら—**奏任官待遇** (名) 奏任官にあらすして、奏任官と同様の待遇を受くるもの。奏任官待遇。準奏任。外交官及領事官官制、名譽領事及名譽副領事は奏任待遇とす」
そら—**奏任文官** (名) 奏任官たる文官。文官試驗委員會官制、奏任文官任用の證書に關する事務」
そら—**走繞** (名) 漢字の偏の名。赴、趨、趣などにある走の字の稱。
そら—**總乘** (名) 味方の總軍勢にて敵城に攻め入ること。毛利家記、數十日城を御攻めさせ候へども、今に弱らず候間、總乘りに可被仰附」
そら—**瘦馬** (名) やせたる馬。やせうま」
そら—**走馬** (名) 馬をはしらすること。又は、はしる馬。詩經、大雅、古公亶父、來朝走馬、率西水滸」
そら—**層倍** (接尾) 倍數を數ふにうふ語。甲陽軍鑑、子息、則數の代に、三層倍、四層倍に身上成りたる人も、傾城酒存童子、せんよ受け出す八百兩、五層倍にせよおかぬ」雙倍」
そら—**總苞** (名) 植物學上の用語。多數の苞一所に集合し、相重なりて成れるもの。菊科植物の頭狀花序の基部を包むもの。又は、穀科植物の花に見る穀斗の如き皆之なり」
そら—**奏報** 古昔、太政官より政事の次第を文書に記して奏上し、主上並御座にて御覽ありて後、御覽の由を史に仰せらるること。北山抄、第二度其國國中、當年不堪、田加久勸申、奏報云、令諸卿定申、江次第、後朝史、通奏

銀行事務人於殿上口取之」
そら—**僧坊** 僧房 (名) 僧侶のをる家。僧侶の宿所。和名、僧坊。法華經云、起塔寺及造僧坊、他經等或云、僧房供養、其德最勝、無量無邊、榮華麗、やがて三昧堂を建てさせ給ふ。僧坊を左右にたてさせ給ひ、平家、清水寺に推し寄せて、佛閣僧房一字も不殘みな鐘を拂ふ。佛閣、四方僧房供給客僧、晉書、僧不仕僧坊」
そら—**僧帽** (名) 僧侶のかぶる帽。
そら—**急忙** 急忙 (名) いそがしきさま。せはしきさまにうふ語。庭訓往來、二月、公私急忙之間、不造、毛舉、運歩、色葉、急忙、陸游詩、三疊、急忙、急忙、急事、何曾一夕忘、杜甫詩、暮婚晨告別、無乃太急忙」
そら—**僧帽筋** (名) 僧の背骨にある筋。肩胛骨を脊柱に向かひて牽接す。
そら—**總判官代** (名) 古昔、國衙の役名。専ら田政に關係したる職なるべし。大神宮諸雜事記、總判官代、酒見文正、伊豫神戶、檢田、程爲、持、東寺百合古文書、文治二年二月廿日、總判官代、位、藤原朝臣、有朝」
そら—**總苞片** (名) 植物學上の用語。總苞の各片。
そら—**澹泊** 物事のあつまる處。
そら—**總旗奉行** (名) 總軍の標とすべき種種の旗、馬印などを奉行するもの。武家にはたぶさやう。のほりぶさやう。甲陽軍鑑、此の六本の御旗奉行一人、總旗奉行一人」
そら—**總髮** (名) 男子の髮の結ひ方の一。額上の月代を剃り去らず、全體の髮をはやし、頂に束ねて髻を作ること。主に山伏、醫師若しくは若年の御坊主など、此の姿をなす。なでつけ。ざんざり。そらがみ。應永、朝士、總髮の事」
そら—**走馬燈** (名) まはりどうらう(迴燈籠)に同じ。荆楚歲時記、正月十日作燈市、探松葉、結繡子、通衢、下、觀華燈、燈有諸品、其懸、人馬於中、以火運之、曰走馬燈」
そら—**總花** (名) 茶屋又は妓樓などに、客より一同の者に饅頭を與ふること。行きとどきて、まんべんなく利益、恩恵を施すこと。
そら—**總花政略** (名) 利益を以てまんべんなく諸人に与はせ喜ばしむる政略。
そら—**總判** (名) 昔、大阪に住したる俳優が、毎年十二月六日の夜、一同役所へ參集し、御法度の趣きを承り、印形して歸りたること。
そら—**雙盤** (名) 寺院にて、圓座の開帳などに打ち鳴らす金剛の盤。佛家のにて、鐘の座、相雙びて打ちやすに擬していふ。
そら—**總番衆** (名) こかばん(五箇番)に同じ。長祿二年以來申次記、正月四日御身固中、總番衆、五箇番、いふ語。崇美、けだかく美しきさまの内に打ち附くる板。
そら—**總監** (名) 總體に生やしたる監。又、それを模して造りたるもの。吉野忠信、翁髮の白髮に、白髮の總監添へてあり」
そら—**走筆** 筆を走らして書くこと。はががき。白居易詩、走筆小詩、和否、北魏詩、走筆操狂詩」
そら—**聰敏** かしこくときこと。聰明にして才智の敏なること。明敏。盛衰記、生まれ有異相、拔群にして聰敏なり。晉書、山濤、形甚短小而聰敏、五代史、和凝、聰敏、形神秀發」
そら—**送附** おくりとどくること。おくりわたすこと。國稅徵收法施行規則、第六、税金送付の責任」
そら—**贈賄** (名) 喪ある家に贈る遺物。香奠。晉書、王、爲、刺史、卒、故吏贈賄數百萬」
そら—**總奉行** (名) その職の事務を總管する奉行。曾我、其、そらぶさやう第一の者なれば、上の御説を承り」
そら—**僧服** (名) そらい(僧衣)に同じ。
そら—**送附書** (名) 送附の旨を記したる書面。國稅徵收法施行規則、第五、市町村に於て領收したる税金は送附書を添へ、漸次之を金庫に送付すべし」
そら—**處分** (名) 遺財を配分すること。又、其の物。分配。分與。宇津保、おとど民部卿に筆とらせ給ひ、御そらぶんの文かかせ給ふ。源朝、本御そらぶんに、ひろくおもしろき宮賜はり、榮華、一條院の御處分なく、うせさせ給ひしかば」
そら—**奏文** (名) 上奏する文。
そら—**奏聞** (名) 奏聞に同じ。後漢書、奏聞、不奏聞」
そら—**總兵** (名) 總體の兵士。總軍。總勢。
そら—**僧兵** (名) 袈裟にて頭を裹み、武裝したる僧侶。法師武者。
そら—**送兵** 兵士を輸送すること。
そら—**増兵** 兵士の員數を増すこと。
そら—**宗廟** (名) 支那にて、帝王の祖宗の靈を祀れる宮。帝王の祖先の御たまや。易經、出可以守宗廟社稷、以爲祭主也。禮記、周子、將、宗廟、宗廟、先、中廟、宗廟之禮、所以序昭穆也。左傳、凡、凡、宗廟、先君之主、曰、宗、支那の制に依りて、帝王の祖先の御靈屋、即ち、伊勢大神宮を申し奉る稱。石清水八幡をも其れに擬して第二宗廟と稱す。保元、宗廟の御計らひも計り難く、凡、凡、宗廟の神、龍宮に記、百王鎮護の崇廟の神、龍宮に神勅を被下、運歩色葉、宗廟」
そら—**送別** 別かれて行く人を見送ること。旅だつ人を見送ること。李嘉祐詩、淮南、送別、臨水惜殘春」
そら—**總別** すべて。おほよそ。概して。總じて。大體。平家、世間人の心も調ら、世間も未だ落居せぬ様に成り行く事を、總別に付きて、歎き思し食せ共、狂言、そらべつ三郎殿は、何にてと承る。甲陽軍鑑、總別如何、御懇切候共」
そら—**送別會** (名) 送別のために催す宴會。送別の意を表する

しもと。脚。老子千里之行、始於足下。一、**そく** (代) 同等の人を敬していふ對稱代名詞。そこもと。きみ。御邊。貴殿。運歩色葉「足下」史記「周樂前即二世數日足下驕恣誅殺無道」同本語「欲足下之國」

そく (俗家) (名) 出家の人に對して、世俗の人の家の稱。

そく (俗歌) (名) 世俗のはやりうた。鄙俗なるうた。陸機文「俗歌」

そく (屬下) (名) 我が手下に屬する人。部下。

そく (俗界) (名) ぞくきやう (俗境) に同じ。

そく (俗解) (名) 俗人に容易くわかるやうに解釋したるもの。諺解。

そく (賊害) (名) ぞくごふ。劉楨文「賊害忠貞」動奸黨。賊より受くる害。

そく (速香) (名) 禪家の語。惡しき香。

そく (息耗) (名) 利と香と。損と得と。三代實錄「息耗」請試許二年、先明「息耗」

そく (側向) (名) 植物學上の用語。側方に向ふこと。

そく (續稿) (名) つづきの草稿。つぎの草稿。

そく (續行) (名) つづけて行ふこと。つづけて行はるること。李嶠詩「簡到江都」續行

そく (屬藁) (名) 草稿を起つること。したかきを作る。宋史「時敏于そく」

俗文、未嘗屬落筆。一、**そく** (俗交) (名) 世俗と交際すること。

そく (辱號) (名) 恥辱を蒙りたる名。辱名。一説、辱詈にて、はづかしめ。恥辱。大鏡「いみじき心ある人とおぼえおはせし人の、くちをしきぞくごう」とり給へる上。盛衰記「辱號かくに爪つひず、勤富かぶるに齒かけず」

そく (測高器) (名) 立木などの高さを測量する器具。

そく (俗客) (名) 風流・文雅の道を解せざる客。無學・不風流の人。俗人。運歩色葉「俗客」杜用詩「休怪兒童延俗客」不致「俗客」

そく (俗學) (名) 俗間に行はるる學問。鄙して高尚ならざる學問。莊子「精于俗學以求復其初」中書問之「蔽家之民」北史「俗學」復加「俗造」

そく (俗樂) (名) 俗間に行はるる音樂。主として三絃樂、箏曲、俗謡等の稱。

そく (測角器) (名) かくどけい角度計に同じ。

そく (足下點) (名) 天「觀測者の位置より、其の地平面に垂直なる直線の、觀測者の足下に於て地球と交はる點。されば足下點は地平面の一の極なり。

そく (東刈) (名) 田地の反別を、其の地より刈り得たばれたる稻禾の束數によりて計算することの稱。かり。越後國檢地帳「本田五百四拾五束刈同宮原給分、増分三百六十刈、此内三十五刈、刈同宮」同「刈」一本田三百拾束刈、同袋藏人「刈」飛州志「此の州の

民は今世も専ら束數を稱するもの多し。既に己れが所持する田畠の高段別をば分明に心得ずして、何百束刈の地、何十束刈の田と云へり。年毎の稻の豊凶を語るも、五束刈の田より六束を得、或ひは四束に及ばずなど云へる、民の通語たり

そく (測桿) (名) 測量の目標又は尺度に用ふる圓棒。主として測角又は横断面の測量に用ふる。善く乾燥したる木材又は鐵、玻璃等を以て製し、長さ六尺乃至一丈二尺にて、一尺毎に白赤のべんきを交互に塗りたるもの。

そく (賊艦) (名) 賊徒の乗れる船。

そく (俗閑) (名) 世俗のあひだ。俗人の仲間。よのなか。民間。漢書「而我放意自恣、浮湛俗閑」

そく (俗漢) (名) ぞくじん (俗人) に同じ。

そく (俗眼) (名) 世俗の人のみ目。俗人の目。卑近なる眼識。集異記「俗眼不識神仙」杜用詩「途窮反遺俗眼」世上未有「如公貧」

そく (測器) (名) 測量に要する器具。

そく (速記) (名) すみやかにしるすこと。速記術によりてしるすこと。そくきじゆ (速記術) の略。

そく (俗氣) (名) 俗人の氣風。卑俗なる氣味。

そく (俗議) (名) ぞくろん (俗論) に同じ。史記「秦人皆以斯極忠、而後五刑死、秦其本、乃與俗議之異」

そく (測器科) (名) 明治十九年四月二十二日海軍水路部に置かれたる一科。測器の保護整備製造、修繕、配賦。

購買等に關する事務を掌るもの。科長。科僚を置く。同二十二年廢せられたり。明治十九年四月勅令第二十六號海軍水路部官制「水路部に測器科を置く」同「測器科に於ては左の事務を掌る」

そく (測器科長) (名) 明治十九年四月二十二日海軍水路部に置かれたる測器科の長官。大尉を以てこれに任じ、水路部長の命を受けて科務を整理するもの。同二十二年廢せられたり。明治十九年四月勅令第二十六號海軍水路部官制「測器科長」

そく (測器庫) (名) かいぐんそく (海軍測器庫) の略。

そく (測器庫主管) (名) 主管の一。中少佐若しくは大尉を以てこれに充て、司令長官若しくは司令官の命を受けて測器庫の事務を掌理するもの。明治三十年九月勅令第三百十九號「測器庫例」同「測器庫主管は中尉其の部庫の事務を掌理す」

そく (速記術) (名) 速記術にて他の演說などを速記すること。

そく (速記術) (名) 簡單なる特殊の文字又は符號にて、演說・講義會議等を其の場に於て發音と同時に速記する術。我が國にては明治十五年岩手縣人田嶺綱紀氏之を發明す。

そく (速記法) (名) 前條に同じ。

そく (速急) (名) きふそく (急速) に同じ。

そく (即狂) (名) 即席に作る狂歌。浮世風月「此の即狂が名人だてね」

そく (觸境) (名) 佛語。五境の一。外物が身に接觸して、之を識別すに效驗あること。

そく (側溝) (名) 排水のため、道路の側に設けたる溝渠。

そく (測候) (名) 氣象を測りうかがふこと。氣象の測候。宋書「測候不精、乃乘除測候」

そく (即功紙) (名) 藥を引きたる紙。頭痛などの時、患部に貼りて用ふるもの。

そく (測候所) (名) 氣象の觀測をなし、天氣豫報及び暴風雨の警報などを發する所。氣象臺測候所條例「測候所を設置せんとする者」

そく (即刻) (名) ただちに。たちどころに。すくに。即時。即座。

そく (屬國) (名) 他に從屬せる附庸の國。漢書「分處降者于河南」其故俗爲「屬國」

そく (俗骨) (名) 卑俗なる氣質。いやしき生れつき。朗詠「爾自願爲俗骨、權權不信、有長生」同「俗骨不可」以「俗骨」爲「俗骨」

そく (側根) (名) 植物學上の用語。單一ならずして、數多の側部を分出せる根。即ち、根根に於ける其の側出せる枝部の稱。普通の植物の根に、概ね之を見るを得べし。

る境界。身根に感ずる對境。

そく (俗境) (名) 無風流なる場所。俗地。俗人の境涯。俗界。

そく (俗形) (名) 俗人の形。普通の人の容貌。古事談「教實親王奉造」立大菩薩御影「盛衰記」

そく (速行天) (名) 三天の一。たうてん (初利天) を見よ。

そく (賊唐) (名) そこなひしひたぐること。殘唐。書經「制喪元良、賊唐」

そく (即興) (名) 即座に起る興味。座興。座に臨みて直ちに詩などを口ずさむこと。即吟。

そく (俗曲) (名) 俗間に行はるる歌曲。樂器に合はせて唄ふ卑俗なる話ひ物。

そく (速記録) (名) 速記術によりて速記したるものを、更に普通の文字に書き直したる記録。

そく (即金) (名) 支拂の義務の發生する即時に、金錢を支拂ふこと。

そく (即吟) (名) 即座に吟咏すること。又、その詩歌。

そく (即金拂) (名) 即金にて支拂ふこと。

そく (俗句) (名) 卑俗なる句。俗句を帯びたる句。

そく (屬具) (名) 其のものに附屬する器具。

そく (屬具目錄) (名) List of equipment。船舶内に備へ置くことを要するもの。商法「屬具目錄」

そく (側臥) (名) 横に臥すこと。

そく (俗化) (名) 世俗の風に感化せらるること。卑俗に化し行くこと。漢書「承周秦之敝、俗化陵夷、民寡禮誼」

そく (俗畫) (名) 高尚なる趣味なき繪畫。卑俗なる畫。つまらぬ畫。名畫記「宋公高士、雖然物外情、不可以俗畫傳其意旨」

そく (賊魁) (名) 賊徒の巨魁。賊兵の長。

そく (俗懷) (名) 世俗の思ひ。名利の思ひ。俗念。

そく (風穢) (名) 人の死すること。臨終。下學集「風穢」

そく (側火山) (名) 地「せいくわさん (寄生火山) に同じ。くわさん (死火山) に同じ。

そく (測申) (名) 測候所の用ひて距離を測定する時、其の兩端の測點を表はすに用ふる鐵の串。其の長さ約一呎あり。

そく (屬官) (名) 屬。又は其の職を奉ずる官吏。

そく (賊軍) (名) 朝敵たる軍勢。外國の寇。

そく (賊計) (名) 賊のはかりこと。即座に決定すること。晉書「賊計不速決」

そく (即決) (名) 即座に裁決する

こと。又、即座に裁決すること。法「警察署長、分署長若しくは其の代理たる官吏、又は憲兵部長、其の管轄地内に於て犯したる拘留又は科料に該たる罪に就き、正式裁判によらず、單に被告人の陳述を聽き證據を取り調べ、又は被告人を呼び出だすこととなく、若しくは呼び出だすも出だせざるときに訊問せず、直ちに其の刑を言ひ渡すこと。此の言渡しに對し、被告人は相當裁判所に正式裁判を請求するを得。違警即決例「警察署長及び分署長又は其の代理たる官吏は其管轄地内に於て犯したる違警罪を即決す」

そく (即決裁判) (名) 陸軍軍人違警罪處分例「即決の言渡しに對しては軍法會議に正式の裁判を請求することを得」

そく (則闕之官) (名) だいじやうだいじん (太政大臣) の異稱。合議解官、太政大臣一人 (中書省) 無其人則闕

そく (俗見) (名) 俗人の見識。世俗の意見。卑俗なる見解。

そく (俗言) (名) 俗間に用ふる言葉。卑俗の言。さびことば。俗語。東鑑「天下の言は古言あり、今言あり。其の中今言に於て又、其の方言あり。方言の中にも亦各雅言あり、俗言あり」

そく (俗諺) (名) 俗間のことわざ。俚語。魏書「且俗諺云、耕則問田奴、耕則問織婢」

そく (族姑) (名) ふたいことをば (族姑) に同じ。

そく (俗語) (名) ぞくげん (俗言)

二に同じ。後漢書「其高者引繩、風喻之言、下則連俗語、有類俳優」

そく (即功) (名) 藥などの、即時に效驗あること。

そく (測候) (名) 氣象を測りうかがふこと。氣象の測候。宋書「測候不精、乃乘除測候」

そく (即功紙) (名) 藥を引きたる紙。頭痛などの時、患部に貼りて用ふるもの。

そく (測候所) (名) 氣象の觀測をなし、天氣豫報及び暴風雨の警報などを發する所。氣象臺測候所條例「測候所を設置せんとする者」

そく (即刻) (名) ただちに。たちどころに。すくに。即時。即座。

そく (屬國) (名) 他に從屬せる附庸の國。漢書「分處降者于河南」其故俗爲「屬國」

そく (俗骨) (名) 卑俗なる氣質。いやしき生れつき。朗詠「爾自願爲俗骨、權權不信、有長生」同「俗骨不可」以「俗骨」爲「俗骨」

そく (側根) (名) 植物學上の用語。單一ならずして、數多の側部を分出せる根。即ち、根根に於ける其の側出せる枝部の稱。普通の植物の根に、概ね之を見るを得べし。

そくた 一 屬託 屬託 〇そのむこと。たのみてまかすこと。依頼すること。又、其の依頼を受けた人。しよくたく。盛衰記(三)所請の悪黨ども、附路・屬託に耽りて、死生不知に耽ひければ、運歩色葉屬託(三)刑事訴訟法(三)罰金の事。屬託すること。〇屬託 賞金の金。しかたばなし。昔獨旅人、夜よかに出でれば、道にて盗賊あまた、金銀をとりとす。其の比奉行所より走り者の各人を尋ねらるるに、屬託をかけた。然る所に、彼の旅人、我れは一人、盗賊は大勢なれば、すべからず、詐りていふは、我れは金銀持ちたる者にてはなし。此の頃奉行所より尋ねらるる者也。夫れ故、夜をこめて愛を立ちのく也。命をゆるせとらば、盗賊は思ひもよらざる者かなと悦び、此の者を召し連れ、奉行所へ行き、そくたを取るべしと思ひ、

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。



そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 一 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 二 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 三 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 四 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 五 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 六 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 七 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 八 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 九 屬託書 (名) 大條に同し。

そくた 十 屬託書 (名) 大條に同し。

そくたーそくた 二九四

そひ (名) 至り極まる處。きはみ。はて。かぎり。萬事あめつちの會許比(三)のうらに、あが如く君に懸らむ人はさね有らじ」後撰下「限りなき名におふ藤の花なれば、そひも知らぬ色の深き」源五入のかたちはおくれたるも、またなほそひあるものを「宇治拾遺」そひも知らぬ谷にて」

そひなし 是て無し。極めて深し。古今「そひなき酒中は歌ぐ、山川の淺き瀬にこそあは波はたて」

そひえ 底冷 (名) どことなく冷えて来たること。身體などのしんそひひゆるること。

そひびかり 底光 (名) 奥にひそめる如き光。あらはれぬ光。毛吹草底光ますとやいはん水の月」

そひぶる (動) すこぶる(願)に同じ。胡學教條「委を執して、そひぶるはやく、いたしく弾くべきなり」

そひまめ 底豆 (名) 足の底に生じた肉刺(ト)

そひみ 底見 (名) みつき見突に同じ。

そひも 其處許 (代) 〇そのところ。蜻蛉日記「中島の松をまはりたる女あり。そひもに紙のはしに書きてかく押しつく」枕草「そひもは落ちたる所に侍るあり、あがりたるなど教へゆ」

そひの 其處邊 (名) 程度を推し量る語。その(ん)そのあたり。そひの浦島年代記「誰れぞ御前に惚れたなら、とんと其處らを海らして、船の波をあげたがよし」

そひの 其處邊 (代) 其のあたり。

そひら ところら 其處邊此處邊 所。ところどころ。そこそこ。そちらこちら。ところちも、其處邊中 其の邊り全體。そこらあたり、すべて。

そひら (動) あまた。多く。こころ。雄略紀「今年陰若千(三)不復稱天」飲明紀「陰若千(三)竹取片時の程とくだししを、そひらの年ころ、そひらのがね賜ひて「源朝」そひらの人のそひら、俄かをも憚らせ給はず」

そひら 其處邊 (名) そひら(其處邊)に同じ。狂言「そひらあたりを尋ねますれど、居りませぬ」

そひら 其處邊 (代) そひら(其處邊)に同じ。狂言「そひら(其處邊)に同じ。居りませぬ」

そひら (動) そひら(若干)に同じ。萬事この箱を開くゆゆめと、會已良久(三)にかためしことを」

そひり 底滓 (名) 底に溜まりたる滓。

そひり (名) そひること。しほひ。

そひり (動) 潮退きて海底あらはる。ひかたなる。

そひり 粗言 粗相な言。無禮の言。夢同契「至誠安後、口無禮言」

そひり 素紗 (名) 白き薄き紗。禮記「夫人衣素紗、秋衣素紗」

そひり 所作 しよう所作に同じ。中務内侍日記「浴室の御神樂は中務のま、かねてより其の人人と定められて、皆まひりぬ」

そひり 蔬菜 (名) 蔬菜類に属する植物の稱。あまの。やさい。はたもの。宋史「泰山、山澤林藪、竹木灌菜」

そひり 魚菜 (名) そまつなる野菜。運歩色葉「魚菜」

そひり 鹿細 ありきとこまかきと。

粗相なると細密なると。運歩色葉「鹿細」

そひり 素材 (名) もととなる材料。原料。

そひり 礎材 (名) いしずみとなる材料。

そひり 蔬菜類 (名) 園圃に栽培し、食膳に供すべき植物の總稱。大根の如く根を食用とするものと、紫蘇の如く葉を食用とするものと、南瓜の如く果肉を食用とするものとあり。

そひり 沮喪 氣落ちすること。心くじけてよむること。源朝「足成、今之沮喪也」

そひり 粗相 龜相 (名) 粗相(粗相)に同じ。榮華「扇なども給はせたらんは、そひりにぞあらんかしなど思ひて」

そひり 運歩色葉「鹿相」狂言「そひりなすがそひりをかきやうではない」同「そひりわごりよは、そひりな事おしゆる」

そひり 粗相 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。津國女夫池「夜中に御一人、此の樹を傳うて、あるまいた、御相至極」

そひり 粗相 粗相 (名) 粗相(粗相)に同じ。津國女夫池「夜中に御一人、此の樹を傳うて、あるまいた、御相至極」

そひり 粗相 粗相 (名) 粗相(粗相)に同じ。津國女夫池「夜中に御一人、此の樹を傳うて、あるまいた、御相至極」

そひり 粗相 粗相 (名) 粗相(粗相)に同じ。津國女夫池「夜中に御一人、此の樹を傳うて、あるまいた、御相至極」

そひり 粗相火 (名) あやまりて起こしたる火災。失火。

そひり 粗相者 (名) 粗相なる行ひをする人。そひりもの。聖徳太子傳記「霜夜と言へる粗相者」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

そひり 粗相 (名) そひり(粗相)に同じ。唐書「市之良賈、皆逐去不出、列那閉者、惟粗相苦留而已」

えねば「運歩色葉」祖師「法華經註如來教化之本原、祖師傳弘之命脈」〇もと。はじめ。祖。浮世床「むかしは萬事の祖、祖だから、いひこはひのさ」

そひ 疎食 (名) そひ(疎食)に同じ。氣くじけてやむこと。

そひ 措辭 (名) 言葉のつかひ方。文章、詩歌にて、辭句の用ひ方。

そひ 訴事 (名) 訴訟ごと。訴訟事件。

そひ (動) そひ(卒爾)に同じ。三河物語「普代之主をそひに取りかへたる者供よ」

そひ 疎食 (名) 「しいは食の字音の延」そひ(粗食)に同じ。論語「食疎食、飲水、曲飲而枕之、樂在其中」

そひ 楚囚 (名) 「左傳の故事より出づ」楚囚にとらはれたる者。とりこ。左傳「楚囚、文子曰、楚囚君子也、言稱先職、不肯本也」

そひ 巧者 巧者に上手なる意に。いふ語。一説、かだむ(野)の意なりと。抄「源氏物語」ただおほやけごと、そひなるもの師どもを、こかしこに尋ね侍りしなり」

そひ 損色 (名) 破損の程度に應じて、修築に必要な材料の大體の見積り。昔時、大工の語と。太平記「柱立て已に訖り、棟木を揚げんとしけるに、損色の綱に、信濃皮むき千束入るべしと、番匠損色を出せり」

そひ 祖師忌 (名) 宗祖の忌日の爲めに、其の當日修する法會。

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」



そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

そひ 組織 (名) 組み立つること。くみだて。劉峻文「組織仁義、疎導德」

他の器官、或は其の一部の、咀嚼器となれるものも少なからず。

そしや—そしや (名) 咀嚼筋 (名) 主として咀嚼の作用に關係する筋肉。即ち、咬筋・頰筋・内外翼筋、之なり。

そしや—そしや (名) 租借地 (名) 租借地 他國の土地を租借する權利。日露開議和條約第五條、露西亞帝國政府は清國政府の承諾を以て旅順口大連並其の附近の領土及領水の租借權及該租借權に關聯し又は其の一部を組成する一切の權利特權及讓與を日本帝國政府に移轉讓渡す。

そしや—そしや (名) 租借地 (名) 租借地 土地。滿洲に關する日清開議和條約第三條、滿洲に關する日清開議和條約第三條、滿洲に關する日清開議和條約第三條、滿洲に關する日清開議和條約第三條。

そしや—そしや (名) 祖述 (名) 祖述 それを本とし、うけつぎて述ぶること。中唐、仲尼祖述堯舜、憲章文武。

そしや—そしや (名) 訴訟 (名) 訴訟 一定の官廳に裁判を請求すること。現今は、裁判所に裁判を請求すること。民事訴訟・刑事訴訟・行政訴訟等の別あり。公式令、凡訴訟皆從下始、各經前人・本司・本屬若路遠、及事礙者、隨近官司斷之。同、凡訴訟須有追據對問者。類案三代格、應決百姓。

そしや—そしや (名) 訴訟代理 (名) 訴訟代理 訴訟を代理する人。民事訴訟法第三條、訴訟を代理する人。民事訴訟法第三條、訴訟を代理する人。民事訴訟法第三條、訴訟を代理する人。

そしや—そしや (名) 訴訟手續 (名) 訴訟手續 訴訟の手續を定めたる法規。即ち、民事訴訟法・刑事訴訟法の類。

そしや—そしや (名) 訴訟費用 (名) 訴訟費用 訴訟の目的物。民事訴訟法第三條、訴訟物の價額。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

訴訟事件—盛衰記四山、末社の訴訟不可疎、末寺の僧侶不可拘、太平記、僧侶訴訟の出入來の時、若し下情上に達せざる事もやあらん、漢書、上訴訟日百數、そしや—そしや (名) 漢書、上訴訟日百數。

そしや—そしや (名) 訴訟抗辯 (名) 訴訟抗辯 訴訟の欠陥又は訴訟障礙の存在により、本案の辯論及び裁判をなすべからざる旨を主張すること。

そしや—そしや (名) 訴訟行為 (名) 訴訟行為 一定の官廳に裁判を請求すること。現今は、裁判所に裁判を請求すること。民事訴訟・刑事訴訟・行政訴訟等の別あり。公式令、凡訴訟皆從下始、各經前人・本司・本屬若路遠、及事礙者、隨近官司斷之。同、凡訴訟須有追據對問者。類案三代格、應決百姓。

そしや—そしや (名) 訴訟費用 (名) 訴訟費用 訴訟の目的物。民事訴訟法第三條、訴訟物の價額。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

そしや—そしや (名) 訴訟無能力 (名) 訴訟無能力 訴訟能力なきこと。

でんとする頃つき。訴訟せんとする如きやうす。曾我三人、君御覽じて、梟原こそ例ならずそしやうがほなれ。

そしや—そしや (名) 訴訟記録 (名) 訴訟記録 裁判所の記録。刑事訴訟法第六條、豫審判事は被告事件其管轄に非ずとし又は他に取調を要することなしと思料したるときは豫審終結の處分に付き檢察の意見を求むる爲め訴訟記録を送致す可し。民事訴訟法第三條、控訴裁判所の書記は控訴狀の提出より二十四時間内に第一審裁判所の書記に訴訟記録の送付を求む可し。

そしや—そしや (名) 訴訟關係 (名) 訴訟關係 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟告知 (名) 訴訟告知 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟沙汰 (名) 訴訟沙汰 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

人間に權利拘束となりたる訴訟に、第三者が參加すること。主參加・從參加・告知參加・附參加の四種に分かつ。各條を見よ。民事訴訟法第三條、第三者の訴訟參加。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

そしや—そしや (名) 訴訟事件 (名) 訴訟事件 訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。民事訴訟法第三條、訴訟の當事者に對する人。

き刈る人を見て。野邊にたつ尾花の袖

のふりあはせ、これも草刈る百姓の縁

(縁は針灸の辛仕事 袖を縫ふこと

の容易なるをいふ語)

(縁袖振り含むも他生の縁 些細の出来

事も、皆因縁のあることなり。狂言

「袖のふり合ふも他生の縁と言ふが、此

のやうな事であらう」

そであき 袖扇 (名) 江戸時代に

奥女中の中老以上が用ひたる扇。骨は黒

塗、長さ六寸七分、地紙は烏子(こ)にて、め

でたき繪模様を描けり。洞房語「お局

中の袖扇子に、五ひ香の匂もいとどし

くときめてめでたし」

そであみ 袖網 (名) かきあみ(垣網)

に同じ。

そでい 粗泥 (名) あらかべ(粗壁)

に同じ。

そでう 租調 (名) 租と調と。

そでうし 袖移 (名) 物を外へ現

はさずして、己れの袖より人の袖の中へ

移し送ること。

そでうの 袖裏 (名) 袖のうらに用

ふる布。賀古教信七基廻「紋紗の衣に、

紅の袖裏」

そでおめて 袖表 (名) そで(袖)を

見よ。

そでかかし 袖格子 (名) 牛車の名

所。袖の裏の、格子にしたる所。蛙抄殿

上人綱代車中箱(箱)と云ふ。

申し文を巻きて其の表になりたる所に、

官姓名朝臣の申請或ひは臨時の内給な

どを外題の如く書き入るもの。一は執

筆の袖書にて、其の内方に書き入るもの。

江次第四巻「自御所下給申文等」中書

以上皆袖書注「内給」建武年中行事「中書

む」短冊つけ袖書して、硯の箱のふたに積

む「書狀の追書」拾玉「文治五年

十一月雪の朝中書その返事に袖書して」

多門院日記「文治十五年書狀の奥書を袖書

と云ふ」

そでがき 袖垣 (名) 物に添へて

低く結ひたる垣。夫木と神まつる頃にも

なればうつきさす、こやの袖がき花咲き

にけり「太平記十八」松の袖垣際あらは

なるに、蓋はひかかて「和船の鑑」方

に垣の如く高く作り設けたるもの。其の

端を矢切立(やきりたて)といひ、上の蓋をくりあ

まおほひといふ。ろっぼん(ろ)だつ。

そでかき 袖笠 (名) 袖をかざして

笠に代ふる。新六帖「何せんに我れ

かざすらし袖笠の下にぞ雲雨とふりけ

る」行宗集「雨ふれば待ちしもせじなお

したがへ、こよひはゆかん袖笠をきて」盛

衰記「十二」柳の五重に紅の袴着て、袖笠

かづける女房(女)。

そでかき 袖笠雨 (名) 袖笠し

て成ほど雨。五十年忌歌念佛「袖笠

雨の宿りにも、心とどめぬ假袴」

方に展開す。眼は内柄上にありて、履足類

中視力最も強し。性、食肉性に於て、熱帯

地方の海に多く産す。③あこやがひ(阿

古屋貝の異名。夫木は浪洗ふ衣の浦の袖

貝を、しほひに風のためおおくかな」

そでかへし 袖返 (名) 犬追物の時、

左の後よりかけて大を射ること。安

そでがらみ 袖搦 (名) 江戸時代、罪

人など

を捕ら

ふるに

用ひた

る武具。袖にからみつけて捕獲するより

いよ。もちり。

そでさちやう 袖几帳 (名) 袖にて

額をおほひかくすこと。几帳を立てて隔

てとしたる如くなればいよ。枕とての

ちかぞ、袖さちやうなど取りのけて、思ひ

なほり賜ふめりし「榮華集」若き人ら

ちまきをあやにくにすれば、御袖几帳の

程をかしく見えさせ給ふに」

そでくま 袖包 (名) 袖につむ

こと。源氏物語「あやしきものに、火をた

ほのかに入れて、そでくまにもたり」

源朝経「その枝を袖の袖くまにとりて出

でにけり」

そでくま 袖括 (名) 袴衣。直垂な

どの袖口の下に、緒を大針・小針交へて刺

したるもの。その端の袂の下に垂れたる

出でたる」④袖の端、手首の出づる所。

源氏物語「つかしきほどなる白き限りを五

つばかり、袖口・すそのほどまでなまめか

しく「榮華初花わかき人は裳唐衣の縫

ひめに、ぬひ物らでんなど、袖口におき口

をし」

そでくま 袖較 (名) 次條に同じ。

宇治拾遺「四の宮内原といふ所に、袖

くらべといふ商人集まる處あり」

そでくま 袖較 (名) 品物の賣買

に、其の價を他に知らせぬやうに、賣主・

買手互ひに袖の中にて手を握りて代價を

定むること。一説に、衣類・反物を賣買す

る市なりとも云ふ。拾玉「あはれなり誰

れも世わたる庵ぞかし、その山科のそで

くらめま」

そでくま 袖包 (名) そでぶき袖

に同じ。砂金袋立ちはづれ霞や雲の

袖くるみ」

そでくま 袖黒 (名) 【動】天條の時、

しるづる(白鶴)の異名。

そでくま 袖裏 (名) 奥の袖に花などを置

て飾りたるもの。蒲津

准后記「十二」聖徳准

后、袖裏(袖裏)と云ふ。

そでくま 袖乞 (名) 又、そ

で食すこと。又、そ

で食すこと。又、そ

で食すこと。又、そ

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで

そで



そで

うにす。ざれさす。ふざげさす。一代女
三飼猫をなづけて、夜もすがら結び髪に
そばえかしけるほどに」

風面に乗り懸かり、脱になれば中に乗り、
際なく湯を取らす」

そばざるのゆみ 側黒弓(名) 竹を
塗らずして木をのみ黒く塗らしたる弓。側
白木の弓の對、堀川波鼓といざや白木に、
そば黒の弓に對に」

落ち附かぬ様子なり。
そばそはし(形) ①かどつ。かどば
る。名義抄「風船」宇津保御草うばそ
くが行ふ山のしひが本、あなそばそはし
とこにあらば「班固文選」上風後
び而接金爵」②よそよそし。親しまぬ
さまなり。源朝臣こきでんの女御、また
此の宮とも御中そばそはしき故うちそ
へ、もとよりの憎さもたし出で」

そばか 薩婆詞(名) 梵 Sāhā 善
説又は散去などと譯す。密教にて呪文
の末にいふ語。子孫の無窮を祈る義。薩
婆一唯阿毘羅呌呌婆阿訶」

そばかつら(名) ①植、科、藤屬の多年
生草本。蔓莖を有して他物に纏繞す。葉
は心臟形、殆ど全縁、鋭尖頭なり。八月頃、
葉腋に淡紅色の花を開き、穗状花序に排
列す。我が國各地の山地に自生す。

そばま 側方(名) かたはらの方。
側面。宇治拾遺「そばまに向かひて、
鼻をひるほどに」同、次に又そばまに
食はんとて走り寄る香なかと打てば」

そばそはし(形) ①そばそはしきさう。
そばそはしきさま。濱松「さすがに餘り
うづもれ入り、そのそばそはしげにはあ
らず、いとあえかになよよと、風にした
がふ青柳のけしきして」

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。

そばかき 蕎麥餅(名) 前條
に同じ。古今夷曲集「蕎麥餅出でける
座にてよめる」

そばがら 蕎麥殼(名) 蕎麥の實を
磨ききたる殻。そばかす。

そばじり 側白木(名) 弓の側木
のそばを白く塗らして、漆塗にせざるも
の。射御拾遺抄「白木そばしきむら
こき、これらは弓に用ふべし」運歩色
蕎麥「白木そばり」節用器、側素材、

そばだち 時(名) そばだつこと。そ
ばだちたること。華立。



そばたーそばり

そばの

そばく

そばむ

三三二

ふものかは、白雲にそらがくれする山標かな
そのかぜ 空風 (名) いっはりてよ
そのふ風邪 君聞近習の者どもは、此の人はそら風を病み給ふにこそぞ、いひあへりける

そのかぞふ 空敷 (枕) そらにおほよそに敷ふる義より、おほにかく。萬天敷のにおほつの子があひし日に、おほに見しかば今ぞくやしき
そのからくる 空縁 (他動) 虚言をあつる。太平記「空縁」加藤のそらからくる者ども、毎夜京白河を廻はつて辻切をしける程に

そのさしやう 空起請 (名) いっはりて書きたる起請文。又、いっはりの誓ひを立つること。龍王、扱も書きたる起請の「賀古教信七基廻千東百東、文車、しじのはしがき空起請」
そのませい 空擬勢 (名) ぎせい擬勢に同じ

そのく 一羽落 狙落 天子の崩し給ふこと。崩御。書經「二十有八載帝乃崩落」孟子「二十有八載、放勳乃崩落」
そのくもり 空曇 (名) そらのくもは道のべの、そらぐもりする夕立の雲
そのけいはく 空輕薄 (名) いっはりて世辭をいふこと。雙生阿田川、笑顔作つて空輕薄、曾我會精山、馬鹿態の空輕薄、結句の引き入れを、仕済まし顔にぞ別かれける

そのこころ 空心 (名) いっはりの心。字津保傳「いとゆゆしき事になん、なでふそらこころにてかは」
そのたへ 空答 (名) 口先にて、よきやうにこたふること。いっはりの返

答。字津保傳「此の御かへりは聞こえさせよとかさばらへら、聞こえんと、いらへ給ふ人もなきに、そらこたへをし給ひつ、さらばときえ給へば」
そのこと 空言 (名) いっはりてこと。ゆふ空言も、あはむときこそせぬのなきに、竹取まことに蓬萊の木かこそ思ひつれ、かくあさましきそらごとにてありければ、土佐日記「よべの菜を、そらごとをして、おきのりわざをして」浮城

そのことごと 空言人 (名) いっはりてこととする人。うそつき。字津保傳「心のうちは、よきそらごと人なりけりなどいふ」廣義王母集山の端の月を忘れてあれれ我れ、そらごと人になりやしぬらん
そのさな 空方 (名) うへの方。上方。宇治拾遺「此の鉢に祿乘りて、ただのぼりに、空さまに、二丈ばかりのぼる」盛衰記「空さま、法師かと思へば、又、髪は空様に生ひあがりて、白髪多く、銀の針を立てたるが如し」

そのさや 空鞘 (名) 刀身よりも不相應に長き鞘。犬筑波、賣をば身に餘るほど持ちにけり、句がね作りのたち、そらさや、孕常勢、赤銅鈎も物結びて、雲の空鞘割け廻はり、目もとも外縁に同じ
そのされ 空戯 (名) たはむるさまをよほふこと。新猿樂記「京童の戯左邊」

そのさわき 空騒 (名) からさわき(空騒)に同じ。字津保傳「京わらは敷しらす集まりて、一の車をばひいて、殿の人人そらさわきすれば、砂石集、堀など掘りて候はば、そら騒ぎの時、馬、人陥りて、中計りなき煩らひ出で来ぬと覺え

そのついで 空礎 (名) あてもなきに打つついで。聖徳太子繪傳「極樂とはよい夢、地獄とは悪い夢見る如く、手にもとられぬ間の夜の空礎」
そのつんば 虚聲 (名) 開きて、聞こえぬ風をすること。筆をよほふこと。又、その人。
そので 空手 (名) 老人などの、何となく腕の痛むこと。慢性りうまぢすの類。一代女、此の二日はそらでが起こりましたと、見ぬ顔をする

そのとけ 空解 (名) 帯、紐などの、自然に解けること。
そのとけ 空解 (名) そらとほけること。浦島年代記「少少の用ならば、年寄つた親を起こさいでもよいこと、おお睡たい事やと、空とほけの大欠伸」井筒菜平河内通「そらとほけ食はぬ食はぬと引き止む」

そのとほける 空惚 (自動) 知りて知らぬ風をよほふこと。知らぬ顔す。
そのとほ 空捕 (他動) 鷹などの、空にて鳥を捕らふこと。永久百首「そらとらぬ鷹もあらじな、かかり野に鷹の上人はあすと思へば」夫木、大原や野邊のみゆきに所得て、空とほけの今日まよふ鷹
そのな 空名 (名) なきな無名に同じ。伊勢集「常にそら名立ちければ」朝忠集「申將にて、そら名たつ頃」

そのなき 虚泣 空鳴 (名) いっはりてなくさまをよほふこと。なくまね。後撰「三天の戸をあけぬあけぬといひなして、そらなきしつる鳥の聲かな」大鏡「栗田殿いかにかくはおぼしめし立ちぬるぞ、只今過ぎなば、自ら降りも出でまうて来ん」と、そらなきし給ひけるは、夫木、ちはやぶらただすの神の森にして、そらなきしつるほととぎすかな

そのし 葉本 (名) 「植かきもち(葉本)の異名。和名、葉本二葉葉。根上苗下似葉、故以名之」
そのし (名) 「植あき(阿魏)の異名。本草和名、阿魏」
そのしげん 空示現 (名) いっはりての示現。砂石集「鞍馬の老僧も、そら示現の故に、互ひに房も皆踏み破られ候ひける事、思ひ合はせらる」
そのしに 空死 (名) しにたるさまをよほふこと。死にたるふり。今昔「裸にて、虚死をして路邊に臥せりければ」

そのしやく 空尺 (名) いっはりて用ふる尺度。うそのものさし。「そらじやくを使ふ」
そのしやくもん 空證文 (名) 眞實ならぬ證文。うその證書。月御雲客妬歌合邊はんと、その證文に業夜種て、数年なりぬこは如何にせん

そのす 反 (他動) そるやうにす。宇治拾遺「鼻を吹きかからせ、きばをかみ、ひげをそらして居たり」君聞「死に入りに、足を踏みそらしければ」
そのいたる 反 反捕 むねを反らしたる捕。紫式部日記「白かげをまるめて、そらいたる捕ど、白きものいみじくつまつまを結びそへたり」

そのす 逸 (他動) のがす。にがす。
そのなげき 空歎 (名) いっはりてなげく風をよほふこと。源氏物語「なほ心けさうはすすみて、そらなげきを打ちしつ」金葉集「はかるめることよきのみ多けれど、そらなげきをばこるにやあるらん」

そのなげき 空情 (名) いっはりて愛情をよほふこと。いっはりてよほひたる心情。藤原根かしの戀路のそら情
そのなりのり 空名告 (名) 名をいっはりて告ぐること。偽名すること。今昔「己れは孩にこそ有りけれ、神と云ふ虚名乗りをして、年人人を欺はんは、極じき事には非ずや」

そのなみだ 空涙 (名) いっはりての涙。うその涙。松風村雨東帯鑑「敵を見る目はそら涙、夫を見る目は誠の涙」
そのなやみ 空惱 (名) けびやう。つくりやまひ。源氏物語「いたうそらなやみをして、みだりごちひとたへがたうて、まかでん空もほどほどしくこそ待りぬべれ」

そのに 空似 (名) 血族の關係なき人の、容貌などがよく似たること。「他人のそらに」
そのにみつ 空見 (他) そらみつに同じ。萬二天雨滿「つやまとおきて、青によしなら山を越え」
そのね 空音 (名) いっはりて眞似の聲。拾遺「摩たててなくといふともほとときす、袂は濡れしそらねなりけり」後撰「三夜をこめて鳥のそらねははかるとも、よにあふさかの關はゆるさじ」

そのね 空寝 (名) いねたるさまをよほふこと。ねたるふり。枕「あれおこせ、空ねならんと仰せられければ」源氏物語「ことなる御いらへもなければ、そらねを

大和物語「よるひるこれをあづかりてと、河ひ給ふほどに、いがかがし給ひけん、そらし給ひてけり」榮華集「手にすゑたる鷹をそらしたるなどいふやうに思ふべし」
そのねの 空心 (名) 人の機嫌を害す。又、機會を逸す。「如才なくて人をそらさぬ顔」曾我會精山「南無三寶入道へと、胸は騒げどそらさぬ顔」日本武尊再妻鑑「ちやんと劍を袖に入れ、いんの子いんの子と撫で摩り、そらさぬ顔も赤らめり」
そのねの 空制 (名) うはべに制止のさまをよほふこと。そらざらしく制止すること。落窪「翁の死ぬべかななりといへど、責むればい音もせず。君、まなまなとそらせしをし給ふ」

そのせいもん 空誓文 (名) そらきしやう(空起請)に同じ。長町女腹切阿蘇「七夜起請、空誓文、日本國の神さんを欺した罪か」心中列水明日「當座まかなひに金取り欺しの空誓文か」
そのせうそく 空消息 (名) 人の手紙といっはること。又、その手紙。源氏物語「そらせうそくをつきづきしう取りつづけて、こまやかにき、え給ふ」

そのせう 反 (他動) そらす(反)の口語。
そのそら (他) そららの重言。すはすは、そのそら、空空(形) そら知らぬさまなり。知りて知らぬふりなり。
そのたき 空薫 (名) 來客などある時、まづ其の座敷に香をたきしめて、香爐をかしく置き、或は陰の座敷にて香をたきて、客の座敷へ匂ふ様にすること。今物語、藤原の局の木丁の中に、そらたきの香みちて、いみじかりけるに、何處よ

しつ、日たかくおほとのごもり起きたり
そのね 空根 (名) 地上にあらはれ出でたる草木の根。貫之集「人しれず物思ふ時はなにはがた、あしのそらねもせられやする」
そのね 空値 (名) いっはりのね。かけね。源氏物語「これの息子はとし幾つぞや。親のいひけるは、あれはそらね十三というて、定計の子十二ちや」源氏物語「折し飾りたる鳥帽子の中、何れか所望候ぞ、善きも悪しきも空値なし」

そのねいり 空寝入 (名) 熟睡のさまをよほふこと。著聞「法師はそらねいりして、此の山伏がふるまひ見居たる程に」
そのねが 空眠 (名) そらね(空眠)に同じ。古事談「そら眠り打ちして居たり」娘歌加留多「舟底に二人をかしくし、空ねがしてゐたりけり」

そのねむり 空念 (名) 前條に同じ。同。慶長見聞集「浦生貞秀入道智阿、一向念佛して敵を欺き、隣國を切り取りしを、其のころ智阿の虚念佛と云ひ、もてはせり」
そのねごひ 空拭 (名) 涙など拭ふさまをよほふこと。源氏物語「そのねごひをして、さらばこそしるまね」
そのねごみ 空呑込 (名) 十分たそらばか 空馬鹿 (名) 馬鹿をよそ

りとも知らずかをり来たる句ひ。夫木「にほひ来る花桶のそらだきは、まがひ螢の火をやとらん」盛衰記「空、風風にさそらだきは、東の袖にぞ通ふらし」
そのたきもの 空薫物 (名) そらたきもの薫物。字津保傳「例のそらたきものなどして、まわり給ふ」枕「そらたきものにしみたる木丁に」源氏物語「そらたきもの、心にくかをり出て」同花集「そらたきもの、いとけふたうくゆりて」
そのたき 空滾 (自動) 空にわき出づ。當流小栗判官「天津少女の空たきる、雲な開て」
そのたづね 空尋 (名) いっはりて尋ねるふりすること。心にもなきたづね。源氏物語「まことに雲の花を見んとてや、我れによそへそらたづねせし」
そのたのみ 空頼 (名) あてにならぬ事をたのみと思ふこと。あいなだのみ。日本武尊再妻鑑「天子を學ぶ身の寄り、人もゆるさぬ萬葉の空頼みこそ危けれ」

そのたのめ 空頼 (名) そら頼みせしむること。結婚日記「定めなく消えかへりつる露よりも、そら頼めする我れは何なり」後撰遺「なほざりてそらたのみせであはれにも、まづに必ず出づる月かな」拾玉「雲さわくそらたのめにや懸りざらん、夕ぐれごとに松むしの聲」
そのちやう 空錠 (名) 見かけのみにて用をなさざる錠。
そのつぎん 空頭巾 (名) 頭巾をのけざまにかぶることか、又は一種のつぎんか。空林風葉「はのほのかぶるたそがれ人のそら頭巾」
そのつたはける 空惚 (自動) そらとほける(空惚)に同じ。浮世床「あくれえそらとほけて、あどけなえまねをしたる者も又あるめえ」

間は漕漕せずして二毛作となすものとあり。記「なつきの多のいながらに」同「山陀」をつくり「萬村人の植うる田」は植まます、今さらに國わかれてあはれはかたせむ「源流」此の家をば寺になして、あたりの田などやうの物は、みな其の寺のことにし置きて、

たうらう 田植 田に稻を植う。枕草賀茂「詣る道に、田うらうとて女の新しきをまじやうなる物を笠にきて」

たごとのつき 田毎月 稻を刈り去りて後、水を流へたる田の一つ一つに、月影のうつりたること。藻鏡草「信州更敷の田毎の月は、城捨山のなだれに四十八階の山田あり申、城捨山上より見おるせば、田毎に月ありて風景斜ならず」蕪村句集「歸る雁田毎の月の曇る夜に」

たつくる 田作 田を耕作す。田を耕作する。繼體紀「躬耕」而勸農業」靈異記「農夫」古今無異、いくばくの田をつくればか郭公、してのたをまを朝な朝な呼ぶ」風俗歌「常陸には田をこそつくれ、あだ心兼ぬとや君が、山をこそ野をこそ雨夜まませる」

たのいほ 田鹿 田を守るために假りに作りて居る鹿。

たのいほ 田鹿 田を守るために假りに作りて居る鹿。甲があれば乙も之に伴ふ、

たのいほ 田鹿 田を守るために假りに作りて居る鹿。甲があれば乙も之に伴ふ、

た手 (名) 手の轉。熟語にのみ用ふる語。記「多」こむらに、あむむきつき「神武紀」多むかひもせず」崇神紀「石むら多」こしに越さば」泉鏡記「よむむら多」こしに越さば」折りかざして遊べども、あきたらぬ日は今日にありけり」

た 咫 (名) あた咫の略。神代紀「咫」神武紀「咫八咫」

た (名) 古語。たぬに同じ。佛足石のよすがとなれり、つとめもろもろ、すすめもろもろ」續紀「國家護多、仁義勝在正開召」萬たつたつをあれは求めむ、昔によし奈良の都にこむ人の多き」

た (他) (名) 巨か。べつ。餘。宇津保書「其の日頃は中只此の頭すまひの事をのみ、たの御心なく」同「たの事申さず、實忠の朝臣の上をなんかへすがへす申し侍りしかば」宇治拾遺「まことの心をおこすといふは他の事にあらざ、佛法を信する也」詩經「無人知其一二、莫知其他」二分以外の人。ほかの人。別人。他人。白居易詩「妬他心似火、燒我髮如霜」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」



(んびーた)

軸に固定せられて廻轉する事を得る羽とあり。がいどターニーンは水を適當の方向に流れしめ、以てほるターニーんに衝き當たる水の作用を最大ならしむるやうに取り附けらる。此の兩者を包容する外器は大きな管に連なり、高處より導き來たれる水は此の管によりて外器内に流入し、がいどターニーンの開を経て、ほるターニーんに衝き當たり、其の有するえねるぎーを之に與へ、以て車を廻轉せしむ。

たーる (英 Turbine) (名) 「化」木材、石炭等を乾餾するとき、水蒸氣及び揮發性の物質と共に備出する黒褐色半流動性の物質。種種の物質を包含す。木(たーる)。こゝるたーる等あり。

たーれる (獨 Talar) (名) 普魯西國の銀貨、我が國の七十四錢六厘餘に當たる。

たあ (名) ちち(父)をいふ、山城國愛宕郡八瀬邊の方言。東海道名所記「父」も母(あ)も京(来た)にやあ、我(も)出てにやあ」

たあい (名) たわいに同じ。

たあい (他愛) 他人を愛すること。自己を第二として、専ら他を重んじ愛すること。利他(自愛の對)

たあいしゆき 他愛主義 (名) (倫) 利己利己主義に同じ。

たあいせつ 他愛説 (名) 自己の利益・幸福を犠牲として、他人の爲めにつとむる主義。

たあいなし (形) たわいなしに同じ。唐船新國姓爺「こりや面白くない、口舌(い)我れ等が好き好きと、餘念他愛もない顔附」

たあた (名) 次條に同じ。

たあた (名) たび(足袋)をいふ、幼兒の語。浮世風呂「お杉坊も紋」のたあた

たあ (名) ちち(父)をいふ、山城國愛宕郡八瀬邊の方言。東海道名所記「父」も母(あ)も京(来た)にやあ、我(も)出てにやあ」

たあい (名) たわいに同じ。

たあい (他愛) 他人を愛すること。自己を第二として、専ら他を重んじ愛すること。利他(自愛の對)

たあいしゆき 他愛主義 (名) (倫) 利己利己主義に同じ。

たあいせつ 他愛説 (名) 自己の利益・幸福を犠牲として、他人の爲めにつとむる主義。

たあいなし (形) たわいなしに同じ。唐船新國姓爺「こりや面白くない、口舌(い)我れ等が好き好きと、餘念他愛もない顔附」

たあた (名) 次條に同じ。

たあた (名) たび(足袋)をいふ、幼兒の語。浮世風呂「お杉坊も紋」のたあた

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

た (多) (名) 多。他よりまされりとす。史記「諸公聞之、皆多哀登」

たーる たあた

た

だ

たーび

三〇

たいえんれき 大衍曆(名) 淳仁天皇の天平實字七年より、儀鳳曆を廢して凡そ九十四年開用ひられたる曆。支那の唐の玄宗帝開元十六年僧一行が周髀大衍の數を推して造りたるもの。續紀四代(天平)廢儀鳳曆、用大衍曆二層法新書(大衍曆)。

たいおう 對應 互ひに向き合ふこと。相對すること。目相手相等しきこと。つりあふこと。目相手に應じて事をなすこと。圖(數)相似直線形の相等しき角、又は相等しき角に對する邊、及び對稱圖形の互ひに對稱の位置にある點、面等は、對應すと云ふ。

たいおうへん 對應邊(名) 數(數)相似直線形の相等しき角の邊。但多角形の相等しき角の邊。

たいおん 大恩(名) 大いなる恩。深きめぐみ。洪恩。厚恩。舊唐書(儀鳳)布初至、便降大恩。古焦仲卿妻詩(謂言無罪過、供養卒大恩)。

たいおん 大恩(名) 恩の洪大なるものは、人却て感知せざれば之に報せず。愛護(冠)女筆記(誌にも、大恩は報せずといへり)。

たいおん 大音(名) たかきおと。大なるこゑ。おほこゑ。たかこゑ。大音聲。大聖。諸正。其の時正尊(阿)しづと打ち寄せて、大音上げて名乗るやう。彈丸(響)早廣が首取つて参りしと、大音揚げて呼ばれば、老子(大音希聲、大象無形)李白詩(大音自成曲、但奏無絃琴)。

たいおん 大陰(名) だいおんじん(大陰神)の略。運歩色養、大陰(方)。

たいおん 大恩教主(名) 佛語。釋尊の尊稱。諸書(大恩教主の秋の月)釋迦如來誕生會(三千世界三世の衆生、意日に照らす大恩教主福ひ置りなす)。

たいおんじやう 大音聲(名) 大いなる音聲。たかきこゑ。おほこゑ。大聖。大音。平家(四)源(四)頼(四)朝(四)義(四)隆(四)の、大音聲を揚げて、井筒菜平河内通(昔に變らぬ大音聲)。

たいおんじん 大陰神(名) 陰陽家の語。方位の八將神の一。大歳神の皇妃なりといふ。昔時、曆にて、其の年此の神の方角に向かひ、婦人に關する臨産、嫁娶等を忌む。

たいか 大家(名) 大いなる家。大屋。富める家。又、貴き家柄。たいけ。書經(封)以(厥)庶民(賦)臣(達)大家(也)。

たいか 大屋(名) 大いなる建物。太平記(安)今(朝)までは奇麗なる大屋。高塔の構(忽)ち(灰)塵(と)成(り)て(同)。

たいか 大屋(名) 大いなる建物。高塔の構(忽)ち(灰)塵(と)成(り)て(同)。

たいか 大屋(名) 大いなる建物。高塔の構(忽)ち(灰)塵(と)成(り)て(同)。

たいか 大屋(名) 大いなる建物。高塔の構(忽)ち(灰)塵(と)成(り)て(同)。

たいが 大我(名) 自我の對。小我の對。宇宙の我。宇宙の本體(小我の對)。

たいが 大我(名) 自我の對。小我の對。宇宙の我。宇宙の本體(小我の對)。

たいが 大我(名) 自我の對。小我の對。宇宙の我。宇宙の本體(小我の對)。

たいが 大我(名) 自我の對。小我の對。宇宙の我。宇宙の本體(小我の對)。

たいが 大我(名) 自我の對。小我の對。宇宙の我。宇宙の本體(小我の對)。

たいかい 大解(名) 西國傳(明)其(大)解(の)を(切)解(して)。

たいかい 大解(名) 西國傳(明)其(大)解(の)を(切)解(して)。

たいかい 大解(名) 西國傳(明)其(大)解(の)を(切)解(して)。

たいかい 大解(名) 西國傳(明)其(大)解(の)を(切)解(して)。

たいかい 大解(名) 西國傳(明)其(大)解(の)を(切)解(して)。

たいがい 大害(名) 大いなる損害。大いなる災害。史記(項)王(連)結(一)人(之後)交(不)顧(國家)之(大)害(也)。

たいがい 大害(名) 大いなる損害。大いなる災害。史記(項)王(連)結(一)人(之後)交(不)顧(國家)之(大)害(也)。

たいがい 大害(名) 大いなる損害。大いなる災害。史記(項)王(連)結(一)人(之後)交(不)顧(國家)之(大)害(也)。

たいがい 大害(名) 大いなる損害。大いなる災害。史記(項)王(連)結(一)人(之後)交(不)顧(國家)之(大)害(也)。

たいがい 大害(名) 大いなる損害。大いなる災害。史記(項)王(連)結(一)人(之後)交(不)顧(國家)之(大)害(也)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。

たいかう 大行(名) 大いなる仕事。大事業。行きて還御せざる義。天皇の崩御あらせ給ひてより、其の靈號を奉らざる間の尊稱。大行天皇。史記(孝)帝(大)行(未)發(喪)禮(未)終(漢)書(孝)帝(上)崩(即)其(夜)於(大)行(前)拜(受)丞(相)博(山)侯(印)授(之)。



淡紅色。江次第十九番。左退紅布... 大黒天 (名) 佛語。[梵] Mahākāśyapa (譯) 三寶を愛し、五業を護り、飲食を充饒にするといふ神。始めは佛法を守護する開闢の神なりしが、後には主福の神となり厨所に安置せらるるに至りしもの。最勝心明王儀軌言、大黒天被象皮、横把一槍、頭穿人頭、一頭穿羊、七福神の一。其の像は普通狩衣の如き服を着て、帽を被り、左肩に袋を負ひ、右手に打出の小槌を持ち、米俵の上に居る。狂言大黒比叡山、西の大黒天、西の宮の恵比須殿(三養雜記四七)ふるく福の神といふは大黒天のみをいへり。

我が國、各地の水田、池溝中に産す。ゆりはなすち。大工長 (名) 明治六年六月二十九日主船寮に置かれたる技術官の一人。少師の下、大工長の介の上にて、同九年八月三十一日主船寮と共に廢せられたり。明治六年六月二十九日太政官布告第二十三號(大工長)。

よしとする如く、大黒を治むるには政を寛にして、自然に任せ、其の民を驚擾せしめざるをよしとす。老子「治大國、若烹小鮮」。大黒 (名) だいくて大黒天の略。狂言大黒比叡山三面の大黒殿へと、前髪をかけてござれば、梵妻の俗稱。厨にのみ居て表へ出でざるよりいふとぞ。一代女、此の寺の大黒になりたれば、和尙にかかへらるる迄待て、長町女腹切「お寺ならば大黒」。おんやうじ陰陽師の異稱。福神の名を取りて祝したるものなりといふ。四しやうもん(唱聞師)に同じ。

多くの煎餅の中のいくつかに小さき大黒の木像を包み入れ、これをえり當てたる人に取らしむるもの。後には玩弄物其の他種種の物を包み入れた。がらがらせんべい。大黒餅 (名) 大黒天の口上。二代男、假初の事も悪しく申しなす煎餅にて。大黒突 (名) 賭博の一種。正徳五年十二月晦日町幅町方にて富突又は大黒つき或ひは併詰前向附、三笠付拵と名付け、博奕が開設敷義堅く致す開敷く候。大黒頭巾 (名) 七福神の一なる大黒天がかぶり居る如き、圓くして低く側邊のふくれ出でたる形の頭巾。雪女五枚羽子板(三)は三面大黒頭巾の裝の敷敷。破枕、風色に染まる大黒頭巾かな。



大黒天 (名) 佛語。[梵] Mahākāśyapa (譯) 三寶を愛し、五業を護り、飲食を充饒にするといふ神。始めは佛法を守護する開闢の神なりしが、後には主福の神となり厨所に安置せらるるに至りしもの。最勝心明王儀軌言、大黒天被象皮、横把一槍、頭穿人頭、一頭穿羊、七福神の一。其の像は普通狩衣の如き服を着て、帽を被り、左肩に袋を負ひ、右手に打出の小槌を持ち、米俵の上に居る。狂言大黒比叡山、西の大黒天、西の宮の恵比須殿(三養雜記四七)ふるく福の神といふは大黒天のみをいへり。

大黒天神 (名) 大黒天に同じ。伊呂波字類「大黒天神」。大黒齒 (名) 上顎にある二枚の前歯のうち、左の方の稱。大黒帽子 (名) 帽子の一種。上の丸形なるもの、角帽などの對。大黒柱 (名) 家の中央に立つる最も太き柱。即ち、鴨居の四方より十字に集まりたる所の柱。古來建物の位置定まりたる時、先づ之を中央に建てて祭をなすより、立初柱(初柱)といひ又、齋柱(齋柱)ともいふ。一代女、大黒柱に寄り添ひて「大黒柱の家國を支持する人。柱石。柱棟。棟梁。大黒柱と稱するは出来ぬ。力の比較にならぬ譬へにいふ。

大黒湯 (名) 大黒天を祭れる上野東叡山の護國院にて、正月三日餅を湯の中にひたして參詣人に飲ましむるもの。これを飲むものは所願成就すといふ。大黒座頭 (名) 昔時、遊里にて、三味線をひき小うた。淨瑠璃をうたひたる座頭。第五種郵便物 (名) つうじやう、うびんぶつ(通常郵便物)を見よ。郵便規則第三、第三種乃至第五種郵便物に在りては三百匁もち箱閉に同じ。東海道名所記「庄や殿の二番子、召しつけらるる太鼓衆には、御出入を致すといふ賣り、なまばりなる戯薬師など、心やすきもの一兩人」。大黒石 (名) 石灰岩の溶解のために奇狀をなしたる塊石。庭園の飾り又は植木鉢などに置きて觀賞するもの。大鼓臺 (名) 太鼓を載する臺。後冷泉院御合文臺をかきたつ、方二尺ばかりなる其の上に太鼓臺をたてて、其の上に太鼓をたつ。太古代 (名) [地]しげんだい(始原代)の異名。太鼓叩 (名) 太鼓をうち鳴らす人。甘言を以て、人の歡心を迎ふること。あひづちを打つこと。又、其の人。太鼓檣 (名) 形、舞臺の太鼓に似たる一種の酒檣。檣にかが

みを取りつけたる形のもの。[註]證の時を用ふる斗檣。太鼓女郎 (名) 客に媚びへつらひて其の歡心を買ふ女郎。又、客なくして茶を扱く女郎。[註]楊屋。茶屋へ呼ばれて琴、三味線、胡弓などをひき、又は舞をも動も座敷の興を添ふる女郎。即ち、胡妓にして藝妓を兼ねたるもの。一代女「たいこちやうらうに加賀節をみて」「一目千軒、牽頭」女郎の事、并藝子の事、是れ男女に限らず、座を持つものをいふなり。今太鼓と俗に書く、是れ花をうてばなるといふ心とぞ、此の説非也。是れ太夫、天神、自ら三味線弾かざる故、三鼓ひかさんと思へば此の女郎を呼ぶ也。腿骨 (名) ももととはぎと。大根漬 (名) だいくてん。後者昔物語後に至りて臺事とて、葦笠人形の如く手道もありて、其の時は足を遣ひしなり。大鼓 (名) [植]だいくん(菜菔)の異名。みかつもとさう(狼牙)の異名。大鼓念佛 (名) 太鼓をたたきて念佛を唱ふこと。一代女「秋の彼岸中太鼓念佛とて中野西へ行く極樂淨土、有り難くも殊勝さも入り拍子の撥」。大鼓俳諧 (名) 太鼓持の俳諧。太鼓坊主 (名) 江戸幕府の職名。太鼓を打ちて時刻を報ずる

大工長 (名) 明治六年六月二十九日主船寮に置かれたる技術官の一人。少師の下、大工長の介の上にて、同九年八月三十一日主船寮と共に廢せられたり。明治六年六月二十九日太政官布告第二十三號(大工長)。

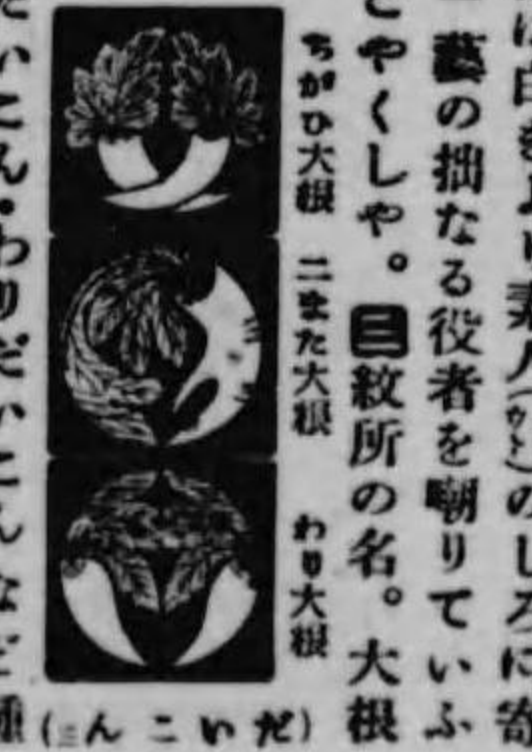
大黒 (名) だいくて大黒天の略。狂言大黒比叡山三面の大黒殿へと、前髪をかけてござれば、梵妻の俗稱。厨にのみ居て表へ出でざるよりいふとぞ。一代女、此の寺の大黒になりたれば、和尙にかかへらるる迄待て、長町女腹切「お寺ならば大黒」。おんやうじ陰陽師の異稱。福神の名を取りて祝したるものなりといふ。四しやうもん(唱聞師)に同じ。

大黒餅 (名) 大黒天の口上。二代男、假初の事も悪しく申しなす煎餅にて。大黒突 (名) 賭博の一種。正徳五年十二月晦日町幅町方にて富突又は大黒つき或ひは併詰前向附、三笠付拵と名付け、博奕が開設敷義堅く致す開敷く候。大黒頭巾 (名) 七福神の一なる大黒天がかぶり居る如き、圓くして低く側邊のふくれ出でたる形の頭巾。雪女五枚羽子板(三)は三面大黒頭巾の裝の敷敷。破枕、風色に染まる大黒頭巾かな。

事を取りたる僧形のもの。明良帝尊也
 「御太鼓坊主」
たいこはし 太鼓橋 (名) 半圓形に類したる石はし。
たいこはら 太鼓柱 (名) こうけいんばしら後見柱に同じ。
たいこはめ 太鼓羽目 (名) 両面を太鼓張にしたる羽目。
たいこはら 太鼓腹 (名) 太鼓の胴の如くふくらんだる腹。婦人の出産期に近づける頃の如き腹。
たいこはら 太鼓張 (名) 戸又は開仕切りの両面を張ること。中間に空開を存して太鼓の如きよりいふ。雍州府志云内外兩面貼紙、是謂太鼓張。
たいこはら 太鼓判 (名) 古甲金の一分金。太鼓の形をなすもの。一分金五厘二朱金四厘五分。朱金四分五厘の三種あり。一分金には背に桐の紋あるとなきとあり。紋の無きを太鼓判古金一分といひ、紋あるものには其の紋の逆さなるものと、横なると、背なると、背なる桐の二箇重なりたるによりて、逆桐、横桐、背桐、背重桐の種あり。
たいこひき 大根引 (名) だいにこんひき大根引に同じ。芭蕉句集巻五、鞍つばに小坊主乗るやだいにこひき。
たいこびき 太鼓鉦 (名) 足細くして、頭の笠の如き鉦。主に飾りに打つ。
たいこぶち 大劫 (名) こぶち(劫)を見たいこぶち (名) 「動」たいこむし(水邊)の異名。
たいごまつり 醍醐祭 (名) 山城國宇治郡の醍醐寺にて、八月九日に行ふ醍醐天皇の祭禮。
たいごまぢゆう 太鼓饅頭 (名) たうまぢゆう唐饅頭の異名。

たいごみ 醍醐味 (名) だいにこん(醍醐)に同じ。下學集「醍醐味」醍醐の如き味ひ。即ち、美味をほめていふ語。最明寺殿百人以上膳、粟の飯とは日本一のだいにこみ、御膳走に預かりたり。「佛語。一乘眞實の法。如來の最上の教法。」
たいごむし 水蠶 (名) 「動」蜻蛉の幼蟲。常に清流に棲み小蟲を食すとす。たいにこむし。
たいごむすび 太鼓結 (名) おたいごむすび(御太鼓結)に同じ。
たいごもち 翫開 太鼓持 (名) 太鼓がひまで居ます、あれを太鼓持に致しませよ。「遊客の大衆を皆の通するより大神に寄せて、其の氣に入るやうに拍子を取るに基くといいひ、或ひは六齋念佛の樂の役割に、鐘を持つものは太鼓を持たず太鼓を持つものは金を持たぬに基くといいひ。遊客に侍し、其の機嫌を取りて酒興を助くるを業とする男子。太鼓衆。一代女、太鼓持をつれ、世間寺の有徳なるを聞きだし」津國女太鼓、太鼓持こそ致せ、命は金で買つたもの、ずんずん刻まれて申さぬ。「人に追従して其の歡心を買ふもの。太鼓叩。」
たいごやくしや 大根役者 (名) 蕨術の拙い役者を嘲りていふ語。だいにこむし。
たいごやくら 太鼓矢倉 太鼓櫓 (名) 屋形船の名所。ふなやかた(船屋形)を見よ。「相撲興行場の前などに高く構へて、人寄せ又は打ち出しの時などに太鼓をたたく櫓。」
たいごり 代垢離 (名) 參宮する人の依頼を受け、代はりて宮川の川水に垢離すること。又、これを業とするもの。風俗文選「百官川の渡りを越えて、代垢離の子供は蛙の如く、一錢刺の鉄は蟹に似たり」
たいごりう 醍醐流 (名) 佛語。眞言宗の古義派の一流。山城國宇治郡醍醐村醍醐寺を本山となすもの。三寶院、理院、金剛王院の三流に分かつ。先德略名口訣「醍醐寺、醍醐三寶院、三寶院、理院、金剛王院」密教の聲明の一流。山城國宇治郡醍醐寺を其の流元となすもの。聲決書「久安年間、由金剛乘院御至覺性法親王御企圖密乘諸山聲明願徳十五人撰、集於仁和寺大聖院御所二十餘日、校合聲明、此時正諸流聲明、即相應院、醍醐流是也。依其流、定博士性相、中權僧正定福主醍醐、各弘通之矣」
たいごり 大根引 (名) だいにこん(大根引)の略。
たいごん 大婚 (名) 天皇の御結婚。皇室婚令第二、大婚の禮は天皇滿十七年に達したる後に於て之を行ふ。同前、大婚の約を成すときは之を賢所皇靈殿神殿に奉告し。
たいごん じふごん じふごんのしう 大婚二十五年祝典之章。明治二十七年二月九日、明治天皇の皇后を御册立あらせられしより滿二十五年を経給へるを祝はせ給ひ、當日御式に參列するを得たる皇族以下の諸員に賜ひたる記章。金銀の兩種あり。皇族は金章、其の他は銀章とす。共に圓形、徑五分餘。輪廓内表面に菊御紋と雙鶴松とを衝み、左右交架藤花の圖、裏面に大婚二十五年祝典之章大日本帝國明治二十七年二月の二十三を讀し、環は圓形、綬は紅色にして中央に黃絲一條を交ふ。明治二十七年勅令第二十三號「大婚二十五年祝典之章」佛語。胎藏界

と金剛界と。
たいごんりやぶ 胎藏界と金剛界との二部。狂言眞胎金兩部の峰を分けし。
たいごん 苦痕 (名) こけのむしたる跡。苔の附きたるかた。劉禹錫文「苔痕上階綠、草色入簾青」
たいごん 大根 (名) 「植」十字花科、菜菔屬の一年生又は二年生草本。莖の高さ三四尺に達し、葉は羽狀に分裂して毛茸を有す。長大なる多肉根は地下にあり。春季、梢上分枝して、淡紫色の十字花を總狀に開き、花の後、長角様の閉果を結ぶ。根、葉共に食用に供せらる。我が國、廣く各地に栽培せらる。おほね。かみつき。すずしり。永正五年狂歌合「正月は牛考ばかりの尾をふりて、いなむとせしをくくる大根」菜菔。蘿蔔。
たいごん 大根 (名) 佛語。ごんじや(權者)の尊稱。盛衰記「西朝、月氏より日域に及んで、大權の芳烈多世を経たり」太平記「西朝、月氏の時、天災をば大權の聖者ものがれ給はるるにや」



來たるといふ。但し、木を伐るを思むと。
たいさいにち 大祭日 (名) たいさいにち(大祭日)に同じ。
たいさいにん 大罪人 (名) 大罪を犯せる人。重大なる罪人。兼歌加留多。「是れこそまことの大罪人」
たいさいび 大祭日 (名) たいさいにち(大祭日)に同じ。
たいさう 大倉 (名) 大いなるくら。莊子「計中國之在海内、不似稊米之在大倉乎」たいさう(大倉)の略。運歩色葉、大倉(大倉)の略。
たいさう 大喪 (名) 天皇が大行天皇、皇后、皇太后、皇孫の喪に丁むし給ふときの稱。皇族及び臣民、喪に服するもの。皇室服喪令「天皇大喪とす」同前「大行天皇及皇太后の爲にする大喪を諱同とす皇太后の爲にする大喪亦同とす」
たいさう 大瘞 (名) 乾したる瘞(の)の實。瘞用とす。「植」てうせんなつめ(朝鮮瘞)の異名。
たいさう 大相 (名) すがた。かたち。體形。榮華玉體相。威儀いづくしく、紫磨金の尊容は秋の月曇りなく、
たいさう 大造 (名) 身體の均齊なる發育、健康の増進、體力の鍛錬、並びに精神の修養を圖りて、體育の目的を達するたための運動の方式。徒手體操、器械體操、兵式體操等の別あり。各條を見よ。
たいさう 大相 (名) 甚だしきこと。非常。いと。最も。多く。大層。
たいさう 胎藏 (名) 佛語。次條の略。盛衰記「西朝、月氏を拜すれば、胎藏の大毗盧遮那佛に給へば」

たいこんおろし 大根卸 (名) だいにこんおろし(山葵卸)に同じ。「大根の根をおろしておろしたるもの。食用とす。おろしだいこん」
たいこんさう 水楊梅 (名) 「植」葎科、水楊梅屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。根葉は略だいにこんに似たり。初夏、莖を抽くこと二尺餘、數葉互生し、梢に至りて漸次小となり、莖頂分枝して毎頭に黄色の五瓣花を著け、後、鉤狀の先端を有する小乾果を聚合して結ぶ。地下部を藥用となして瘡腫に效あり。若き莖葉を食用とす。我が國、山林、陰地に自生す。くさぐさり。くさくさ。くそぼこり。こましとき。すむせいうなぎづる。
たいこんさう 大根草 (名) 「植」こまつなぎ馬蹄の異名。
たいこんしやうじや 大權聖者 (名) 佛語。ごんじや(權者)の尊稱。大權。太平記「西朝、天皇、是れ誠に大權聖者の、末代を襲ひて記し置き給ひし事なれども」
たいこんつけ 大根漬 (名) 大根の根の漬物。からづけ(漬物)やくぼんづけ(漬物)たくあんづけ(漬物)の類。
たいこんな 水楊梅 (名) 「植」だいにこんさう(水楊梅)の異名。
たいこんのさうむし 菜菔象蟲 (名) 「動」昆蟲類、鞘翅類の一種。體の長さ七八厘、全身黒色にして灰白色の鱗毛を密生す。口吻の末端と脚とは赤褐色にして、脚に白き鱗毛あり。田圃に出て、菜菔、豌豆、甘菜等を害す。
たいごんひき 大根引 (名) 大根を鼻よりひきぬくこと。だいにこひき。
たいごん 大佐 (名) 最高級の佐官。即ち、陸軍大佐及び海軍大佐の總稱。
たいご 大差 (名) 大なる差異。甚

だしき相違。淮南子「分帝王之操、列大小之差者也」
たいご 胎座 (名) 「植」植物學上の用語。子房内部に胚珠を保持する器官。即ち、胚珠の着生する所。
たいご 對座 對坐 (名) むかひ合ひて坐すること。又、むかひ合ふ坐席。著聞。「尊者として、南階より上りて、對座に居るとして、尊者の對座に居れば」
たいご 臺座 (名) 物を載せおく臺。器具の下敷。佛像の臺。櫻陰比事「臺座を極めさせ御覽ありしに、一つの折紙あつて」正觀記「蓮花即臺座者、上文紫金臺」
たいご 大才 (名) 大いなる才能。すげたる器量。又、其の用。運歩色葉「大才」唐書「大才當大用」
たいご 大祭 (名) 盛大なる祭典。大規模のまつり。おほまつり。大典。論語「使民如承大祭」
たいご 大祭 (名) 皇室的祭禮の一種。天皇が皇族及び官僚を率ひて親しく祭典を行ひ給ふもの(天皇喪にあり、其の他、事故あるときは皇族又は掌典長に行はしむ。即ち、元始祭、紀元節祭、春季皇靈祭、春季神慶祭、神嘗祭、秋季皇靈祭、秋季神慶祭、神嘗祭、新嘗祭、先帝祭、先帝以前三代の式年祭、先帝の式年祭、皇太后の皇后の式年祭の稱。皇室又は國家の大事を神宮寶所、皇靈殿、神武天皇山陵、先帝山陵に親告し給ふとき、神宮の造營により新宮に奉遷するときは、賢所、皇靈殿、神慶の造營により本殿又は假殿に奉遷するときは、天皇、太皇太后、皇太后の靈代を皇靈殿に奉遷するときは、大祭に準じて祭典を行ふものとす。皇室祭祀令「大祭は、大祭及小祭とす」同前「大祭に

は天皇皇族及官僚を率ひて親ら祭典を行ふ」同前「大祭及其の期日」同前「大祭、豐受大神宮にては神嘗祭、新年祭、神御衣祭、皇大神宮及び荒祭に限り、月次衣(六月、十二月)、新嘗祭、臨時奉幣式、正遷宮、其の他の神社にては新年祭、新嘗祭、例祭、臨時奉幣式、本殿遷座の稱。明治二十七年内務省訓令第三百二十七號「大祭」甚だしき災難。
たいご 大災 (名) 大なる災難。
たいご 大裁 (名) 大いなる裁断。裁に同じ。鄧文原詩「上下漢唐觀體裁」
たいご 大罪 (名) 重大なる罪。即ち、大罪。重罪。書經「乃有大罪、非終、乃惟背災」戰國策「非有大罪、而亡必有故」
たいご 大祭日 (名) 大祭の當日。銀行條例「銀行の休日は大祭日、日曜日、日曜日、最も重き祭日」
たいご 大宰相 (名) 諸大臣の首班たる大臣。即ち、太政大臣又は總理大臣の稱。
たいご 太歲神 (名) 陰陽家にいて、木星の精に名づけたるものにて、八將神の一。子年には子の方位にある如く、毎年其の年の支と同方位に遊行す。此の神の方向に向かひて吉事をなせば福

と金剛界と。
たいごんりやぶ 胎藏界と金剛界との二部。狂言眞胎金兩部の峰を分けし。
たいごん 苦痕 (名) こけのむしたる跡。苔の附きたるかた。劉禹錫文「苔痕上階綠、草色入簾青」
たいごん 大根 (名) 「植」十字花科、菜菔屬の一年生又は二年生草本。莖の高さ三四尺に達し、葉は羽狀に分裂して毛茸を有す。長大なる多肉根は地下にあり。春季、梢上分枝して、淡紫色の十字花を總狀に開き、花の後、長角様の閉果を結ぶ。根、葉共に食用に供せらる。我が國、廣く各地に栽培せらる。おほね。かみつき。すずしり。永正五年狂歌合「正月は牛考ばかりの尾をふりて、いなむとせしをくくる大根」菜菔。蘿蔔。
たいごん 大根 (名) 佛語。ごんじや(權者)の尊稱。盛衰記「西朝、月氏より日域に及んで、大權の芳烈多世を経たり」太平記「西朝、月氏の時、天災をば大權の聖者ものがれ給はるるにや」

じ。榮華五馬心かしくからん御乳母は、人の御ためにたいせちものぞありける。讀鼓典侍日記「さまでたいせちにも思ひ召さじと思ひて」

たいせつ 大節 (名) 大いなる節操。重き節義。大義。十訓書大節身にある時は、小過ありといへども不孝とせず。論語書「可託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與」左傳「男女之別、國之大節也」重大なる事件。大事。左傳「義以生利、利以平民、政之大節也」

たいせつ 大節 (名) 大いなる寺院。巨利。大伽藍。太平記「如何なる大節の長老、大者舊の人も、踏次に行き會ふ時は、膝をかがめて地に跪き」元史「起大節于京西善安山」

たいせつ 類雪 (名) ぐれ落つる雪。なだれ。

たいせつ 體節 (名) 動くわんせつ (京節) の異名。

たいせつ 大雪 (名) 烈しく降る雪。多く積れる雪。おほゆき。左傳「平地尺爲大雪」二十四氣の一。冬の季節にて、陽曆十二月七日頃にあたる。

たいせつ 大切 (名) 大事にすること。鄭重にすること。懇に扱ふこと。大事。必要。肝要。保元平治の亂、下も大切の人に思召しけり。東鑑「六月廿九日、家人を大切と存じ候」

たいせつ 大捷 (名) 大いに勝利を得ること。おほがち。大勝利。魏志「其拔毒春。女王欲輕兵深入、基以爲大捷之後、上下無敵、則慮難不深」

たいせつ 大川 (名) おほかは。大河。東遊雜記「清水、清川及び此所迄の流れを見て、諸州の大川にくらべて予が考へて記す」易經「道無有乎元亨、貞吉」

利涉大川。書經「禹禹隨山刊木、奠高山大川」

たいせん 大船 (名) 大いなる船。浮江以下。史記「大船積粟、起於汝山、立以上の船の稱」

たいせん 大柱 (名) 船の床、又は臺にある木の柱。河船は柱にあり。

たいせん 大仙 (名) すぐれて尊き仙人。願況詩「身披六銖衣、儼劫爲大仙」佛語。によらい(如来)に同じ。般若燈論「摩訶薩等亦名仙、於中最尊上中尊故名大仙」

たいせん 万錢 (名) 銀惡なる方孔錢。明治三十六年律令第四號「万錢租惡なる方孔錢の輸入」

たいせん 胎仙 (名) 動くる(鶴)の異名。

たいせん 苔蘚 (名) 植こけ。蘇吾。蘇叔倫詩「石盡苔蘚、香徑白雲深」

たいせん 大戦 (名) 大いに戦ふこと。激戦。書經「大戦于甘乃召六卿」おほがちの戦争。大戦争。

たいせん 對戦 (名) 敵と味方と相對して戦ふこと。應戦。

たいせん 大漸 (名) 病勢の漸漸に重くなること。珠に帝王の病勢の大に進ませらるること。書經「嗚呼疾大漸惟幾」

たいせん 類然 (名) たふれくづるさまに類する。柳宗元文「引觸滿酌、類然」

類然就醉。目老衰せるさまに類する。

たいせん 泰然 (名) 落ちつきて物事に動ぜぬさまに類する。自若。元史「家貧射中、泰然」

たいせん 堆然 (名) うづたかきさまに類する。

たいせん 代錢 (名) だいきん(代金)に同じ。

たいせん 大千 (名) 佛語。だいきん(大千世界)の略。白隠禪師手簡「だいきんを派沫に屬し」

たいせん 大箭 (名) 大なる矢。魏書「以強弩大箭射鹿、鹿即入、鹿箭而斃、彼民見箭、皆云狂弩」

たいせん 大勝 (名) だいきん(大勝)の略。榮華「四月には御けいの日、やがて大勝にいらせ給ふ」二中歴「大勝。大夫」

たいせん 大全 (名) 十分に完備すること。十全。莊子「吾不知天地之大全也」其の物事に關したるものを漏れなく編纂したる書物。胡廣文「伏蒙命臣等、編輯五經四書大全、及性理大全書、今編輯已成」

たいせん 大千界 (名) 佛語。だいきん(大千世界)の略。榮華「大千世界の目輪を集めたるが如くして、無漏の萬徳莊嚴せり」

たいせん 大選舉區 (名) 教所の名。法「法」選挙區の區域を廣く定め、一人の議員を出す選挙區(小選挙區の對)

たいせん 大宣敎使 (名) せんけう(宣敎使)を見よ。法令全書「宣敎使」大宣敎使。同員權大宣敎使

たいせん 大宣旨 (名) 中右の宣旨の一。大臣宣して、辨官の奉じたるもの。西宮記「大宣旨。某物若干、大右今日、親王已下、彼等所請。年月日。某大臣宣旨、充之。某辨姓朝臣某奉宣旨」

たいせん 大勝鶴 (名) 動くたいせん(大勝)の異名。

たいせん 大勝職 (名) 昔時、宮内省に屬し、膳進を調進し、臣下に賜ふ膳進などを掌りたる所。おほがちのつかさ。合義解「大勝職。大夫一人、膳進を掌りたる所。おほがちのつかさ。合義解「大勝職。大夫一人、膳進を掌りたる所。おほがちのつかさ。合義解」

明治二十二年七月宮内省第十號宮内省官制「大勝職。同大勝職。大勝職に左の職員を置き、供御要及器具に關する事務を管理し、主管に關する會計を掌る」

たいせん 大千世界 (名) 佛語。大千世界を千倍したるもの。即ち、一の須彌山、日月、一の四天下、及び上は六欲覺世天に至るを、大千世界とし、これを百萬億箇たる世界。大千世界。大千。維摩經「大千世界。是世間同居大地之間、界謂各有彼此之別」

たいせん 大戦争 (名) たいせん(大戦)に同じ。

たいせん 大前提 (名) 論「三」段論法に於て、二箇の前提の中、大概念を有する前提の稱(小前提の對)

たいせん とおも (名) 教所の名。

たいせん のかみ (名) 大膳大夫 (名) 大膳職の長官。職員令「大膳職。大夫一人」

たいせん のかみ (名) 大膳頭 (名) 大膳寮の職員。寮務を掌りし、所部職員を監督する勅任官。宮内省官制「大膳頭。大膳職の長官。職員令」

たいせん のじょう (名) 大膳進 (名) 大膳職の判官。

たいせん のすけ (名) 大膳亮 (名) 大膳職の次官。官位令「從五位下大膳亮。明治二十二年七月宮内省第十號宮内省官制」

たいせん のだい (名) 大膳大夫 (名) 大膳職の長官。職員令「大膳大夫。省連第十號宮内省官制」

たいせん のし (名) 大膳寮主事 (名) 宮内省の一部局。供御及び要宴に關する事務を掌るもの。頭、主事、主膳長、主膳及び膳手の職員を置く。宮内省官制「大膳寮主事。大膳寮の職員。寮務を掌る。寮任官。宮内省官制」

たいせん のし (名) 大膳寮主事 (名) 宮内省官制「大膳寮主事。大膳寮の職員。寮務を掌る。寮任官。宮内省官制」

たいせん のし (名) 大膳寮主事 (名) 宮内省官制「大膳寮主事。大膳寮の職員。寮務を掌る。寮任官。宮内省官制」

たいせん のし (名) 大膳寮主事 (名) 宮内省官制「大膳寮主事。大膳寮の職員。寮務を掌る。寮任官。宮内省官制」

詩經「大業。太宗維翰」禮記正義「百世不遷者太宗也」

たいせん 大族 (名) 大族 (名) 二律の一。禮記「其音角、律中「大族」」陰曆正月の異稱。

たいせん 大層 (名) たいさう(大相)に同じ。

たいせん 代僧 (名) かはりの僧。代理の僧。運歩色業代僧。陸奥歌「播粉木の頭の圓い、長老の代僧で仕舞はるる」

たいせん 大乘 (名) 佛語。だいいじょう(大乘)に同じ。源實「おし。ことどもりぞ、大ぞうせりたる罪にも救へためるかし」

たいせん 大僧正 (名) 最高等の僧官。僧正の上位。初例抄「大僧正。行基。天平十七年正月廿一日任」釋家官班記「下僧正。釋門棟梁也、尤爲規模宗長者大僧正」

たいせん 大僧都 (名) 僧都の上位。續紀「大僧都。善住法師爲大僧都」

たいせん 大僧都 (名) 僧都の上位。續紀「大僧都。善住法師爲大僧都」

たいせん 大僧都 (名) 僧都の上位。續紀「大僧都。善住法師爲大僧都」

たいせん 大僧都 (名) 僧都の上位。續紀「大僧都。善住法師爲大僧都」

たる戦。法令全書「大總督參謀。大總督が其の事務を取り扱ふ役所」

たいせん 大層 (名) 大層なるやうなり。仰山なるさまなり。

たいせん 大總領 (名) 常陸大塚平氏の總領地頭たるもの。

たいせん 大則 (名) 大なる規則。たのめいをつくこと。なげくこと。戰國策「莫敢大心中。願而太息曰、嗟乎予乎、楚國亡之日至矣」史記「仰天大息」同「嗚呼大息曰、大丈夫當如此也」

たいせん 大息 (名) 大なる規則。たのめいをつくこと。なげくこと。戰國策「莫敢大心中。願而太息曰、嗟乎予乎、楚國亡之日至矣」史記「仰天大息」同「嗚呼大息曰、大丈夫當如此也」

たいせん 大息 (名) 大なる規則。たのめいをつくこと。なげくこと。戰國策「莫敢大心中。願而太息曰、嗟乎予乎、楚國亡之日至矣」史記「仰天大息」同「嗚呼大息曰、大丈夫當如此也」

たいせん 大息 (名) 大なる規則。たのめいをつくこと。なげくこと。戰國策「莫敢大心中。願而太息曰、嗟乎予乎、楚國亡之日至矣」史記「仰天大息」同「嗚呼大息曰、大丈夫當如此也」

の様な流行がなるものでありやぞ」

たいせん 大屬星 (名) 陰陽家の祭る星の名。今昔陰陽師天文博士弓削是雄と云ふ者を請じ下だして、大屬星を令祭るとする開」

たいせん 大屬星祭 (名) 陰陽家にて大屬星を祭ること。伊呂波字類「大屬星祭。陰陽師」

たいせん 大訴訟 (名) 大なる訴訟。おほいでり。

たいせん 大退宿 (名) だいいしやう(退宿)に同じ。和名「高麗樂曲。退宿。龍鳴抄「退宿」」

たいせん 大退宿 (名) だいいしやう(退宿)に同じ。和名「高麗樂曲。退宿。龍鳴抄「退宿」」

たいせん 大退宿 (名) だいいしやう(退宿)に同じ。和名「高麗樂曲。退宿。龍鳴抄「退宿」」

たいせん 大退宿 (名) だいいしやう(退宿)に同じ。和名「高麗樂曲。退宿。龍鳴抄「退宿」」

